

事業概要

令和6年版

東京都土木技術支援・人材育成センター

調査・開発



【低炭素（中温化）アスファルト 場内試験施工】

低炭素（中温化）アスファルトの締固め性能を確認する為、実施工と同一条件で試験施工を実施



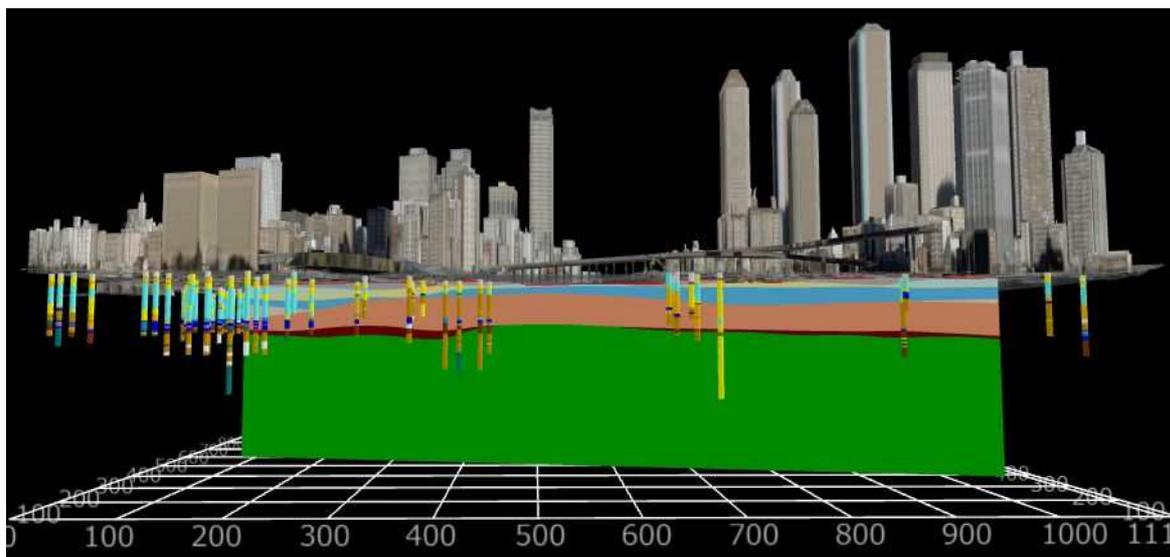
【低炭素（中温化）アスファルト】
機械式フォームドによりアスファルトを発泡させることで、混合物の製造温度を低減することが可能となる技術



【輪荷重走行疲労試験機（戸田橋実験場）】

橋梁床版の耐荷力向上や劣化損傷した床版の補修を可能とする防水性能を兼ね備えた薄層増厚材による補強・補修工法を、戸田橋実験場の試験設備等を活用して検討

技術情報の蓄積・提供



【3D地盤図】

センターが保有する地質データ等を活用して3D地盤図を作成。山地部（多摩西部及び島しょ部）を除く都内全域の3D地盤図を令和7年度にWeb公開予定



【東京の液状化予測図】

東京の液状化予測図は、ボーリングデータによる液状化判定と、地形や液状化履歴など5つの地図情報による液状化判定を組合せて作成し、予測に用いた情報をホームページからダウンロードできるようにしている



【地下水位の観測】

都内42個所に観測井を設置し、地下水位や地盤沈下を測定
測定結果は各種地盤沈下対策の基礎資料であるとともに学術的にも貴重な資料として広く利用されている



ま え が き

東京都土木技術支援・人材育成センター（以下「センター」という。）は、大正11年に東京市道路局試験所として発足以来、東京都土木技術研究所、東京都土木技術センターと組織・名称を変更しながら、令和4年4月に設立100周年を迎えることが出来ました。

この間、土木事業に関わるさまざまな調査・開発や貴重な技術情報の蓄積・提供を実施するなど、局の業務を下支えしてきました。

現在、センターは、これまで培ってきた技術や知見をもとに、計画・設計・施工・管理の各段階における事業現場での技術的な課題や問題に対して直接現場をサポートする「現場の技術支援」と各事業部署における政策実現に向けた課題解決に資する「調査・開発」に取り組んでいます。

また、これらの取組を支える地盤や地下水、公共基準点等のデータを継続的に収集し、広く都民等に発信する「技術情報の蓄積・提供」や過去の貴重な資料等を収集・整理・公開する「土木技術情報ライブラリー」を着実に実施しています。

切迫する首都直下型地震や気候変動による頻発化・激甚化する風水害などの自然災害、2024年問題、DXの進展など都政を取り巻く環境は激しく変化しており、強靱で持続可能な都市・東京の実現のためセンターの果たす責務は大きくなると考えています。

今後とも、関係部署等との綿密な連携のもとに、建設局ならびに各局、区市町村の施策やインフラ整備と維持管理を支え、技術職員の技術力向上に向けて取り組んでまいります。

目 次

I センターの概要

| | |
|------------|---|
| 1 事業の概要 | 1 |
| 2 沿 革 | 2 |
| 3 組織及び分掌事務 | 4 |
| 4 職員配置表 | 5 |
| 5 予算及び決算 | 6 |

II 業務の内容

| | |
|--------------------------|----|
| 1 現場の技術支援 | 7 |
| 2 事業計画に基づく調査・開発 | 8 |
| 3 技術情報の蓄積と提供 | 19 |
| 4 土木技術情報ライブラリー | 24 |
| 5 建設局工事監督補助業務に関する技術者等の認定 | 28 |
| 6 職員表彰受賞一覧 | 29 |

III 成果の公表等

| | |
|-------------------------|----|
| 1 土木技術支援・人材育成センター発表会の開催 | 31 |
| 2 センター技術ニュースの発行等 | 32 |
| 3 東京都土木技術支援・人材育成センター年報 | 33 |
| 4 大学等との共同調査研究 | 34 |

IV 活動・行事

| | |
|-----------------------------------|----|
| 1 科学技術週間関連行事 センター一般公開 | 35 |
| 2 「くらしと測量・地図展」の共同開催 | 36 |
| 3 「土木技術講習会」(土木技術研修)の開催 | 37 |
| 4 地方公共団体建設技術試験研究機関連絡協議会(建試協)総会の開催 | 38 |
| 5 東京都技術情報連絡協議会の運営 | 39 |
| 6 土木の日関連行事 土木技術体験学習、センター一般公開 | 40 |
| 7 「東京 橋と土木展」、センターアーカイブ展 | 41 |

付 録

| | |
|-----------|----|
| 【主な用語の解説】 | 42 |
| センター案内図 | 48 |

I センターの概要

1 事業の概要

1 概要

東京都土木技術支援・人材育成センターは、大正11年に東京市道路局試験所として発足以来、東京都土木技術研究所を経て、長年にわたり培ってきた調査・研究の実績を引き継ぎ、平成21年4月に東京都における土木技術支援及び人材育成を担う組織として設置され、令和4年4月に設立100周年を迎えた。

当センターは、政策策定から工事現場に至るまでの様々な段階で生じる課題や問題点に対して、蓄積してきた技術や知見を活かして現場をサポートする「技術支援」を基幹業務のひとつとして継続的に取り組んでいる。そのために必要な「調査・開発」、「技術情報の蓄積・提供」、「土木技術情報ライブラリー」などについて取組みを行い、建設局事業等を下支えしている。

2 役割

建設局では、都民の安全で快適な生活や都市活動を支える道路、河川、公園などの都市インフラの整備と維持管理を担っているが、計画から設計、施工、維持管理までの各段階において様々な技術的課題や問題に直面している。また、都民への説明や様々なご意見ご要望への対応にあたり、技術的裏付けが必要とされたり、自然災害や大事故などの発生時における、都民の安全や利便を確保するために緊急な対応が求められることもある。

センターは、各建設事務所、都庁各局及び区市町村等からの支援要請に対し、調査・開発等で得られた知見、これまで蓄積してきた技術とノウハウや保有する技術情報をもとに、課題解決に向けた積極的な技術支援を行っている。

また、地盤情報、液状化予測図、公共基準点などの技術情報を広く公開し、都民等に還元させるとともに、所蔵するアーカイブ資料は東京都史としては勿論、土木工学の発展のうえでも貴重な資料としてデータベース化し、事業執行に活用するとともにイベント等の機会を通じて広く都民へ公開している。

3 取組

技術支援のための4つの取組

(1)「現場の技術支援」

現場を直接サポートし、現場状況に応じて適切な課題解決を提

(2)「調査・開発」

建設局の政策実現に向け、計画的・継続的な調査開発を実施

(3)「技術情報の蓄積・提供」

設計、施工に必要な技術情報を収集し、蓄積したデータは広く公表

(4)「土木技術情報ライブラリー」

過去の貴重な資料等を収集・整理し、イベントなどを通して土木技術をPR

2 沿 革

| | | |
|-----------------|---------------------------|---|
| 大正11年 (1922) | 東京市 道路局試験所 | 大正11年(1922)4月4日、「東京市道路局試験所」として麹町区有楽町の東京市衛生試験所構内(現在、丸の内3丁目)に所長以下28名で発足 大正11年(1922)10月、新大橋際(現在の江東区)の水道課出張所の一部に新大橋分室を設置 |
| 12年 (1923) | 関東大震災 | 大正12年(1923)9月1日の関東大震災で新大橋分室焼失 |
| 13年 (1924) | 庁舎移転 | 大正13年6月23日、芝区新芝町12番地(現在の港区芝浦3丁目、札の辻橋際)に庁舎を新築し移転 |
| 15年 (1926) | 東京市土木局 道路課試験所 | 大正15年(1926)12月6日、東京市の組織改正に伴い、「東京市土木局道路課試験所」に改称 |
| 昭和3年 (1928) | 瀝青乳剤製造 | 昭和3年、瀝青(アスファルト)乳剤の製造開始 |
| 4年 (1929) | 特許取得 | 昭和4年(1929)年2月26日、道路散布用瀝青乳剤の製造方法の特許第80698号と特許第80699号を取得 同年、瀝青(アスファルト)乳剤製造工場設置 |
| 7年 (1932) | 東京市土木局 土木試験所 | 昭和7年(1932)10月1日、東京市の市域拡張による土木局の機構改革により、「東京市土木局土木試験所」に改称、工事材料の検収試験を財務局経理課技術試験所に移管 |
| 13年 (1938) | 瀝青乳剤製造移 管 | 昭和13年(1937)3月末、瀝青(アスファルト)乳剤の製造を西新井瀝青混合所に移管 |
| 15年 (1940) | 地盤沈下調査業 務引継 | 東京帝国大学地震研究所から土木局道路建設課に移管していた地盤沈下調査業務を昭和15年度に当所が引き継ぐ |
| 17年 (1942) | 東京市 土木技術研究所 | 昭和17年(1942)5月14日、東京市土木局の機構改革に伴い「東京市土木技術研究所」に改称し、調査掛と研究掛を置く |
| 18年 (1943) | 渋谷分室 東京都土木技術 研究所 | 昭和18年(1943)4月1日、東京市経理局用品課技術試験所を吸収合併し、渋谷分室となる 昭和18年(1943)7月1日、東京都制の施行に伴い、「東京都土木技術研究所」と改称し、「掛」を「係」に改め、研究係と調査係を置く |
| 20年 (1945) | (廃止) 東京都土木技術 研究所 | 昭和20年(1945)3月9日深夜～10日の空襲で地盤沈下観測所が焼失(日比谷公園の観測所のみ残存) 昭和20年(1945)3月31日をもって「東京都土木技術研究所」が廃止 昭和20年(1945)5月25日深夜～26日の空襲で芝浦の本庁舎と渋谷分室が焼失 |
| 昭和23年 (1948) | (再発足) 東京都土木技術 研究所 | 昭和23年(1948)11月11日、港区芝高浜町10番地(現港区港南一丁目1番18号)に「東京都土木技術研究所」が再発足 |
| 27年 (1952) | 機構改革 機械整備課 | 昭和27年(1953)11月1日の機構改革により、建設局総務課芝浦機械修理工場及び整備工事課機械整備所を吸収合併し、土木技術研究所機械整備課を設置 |
| 34年 (1959) | 地質係 無機材料第一係 無機材料第二係 | 昭和34年(1959)4月15日、調査課に地質係設置、無機材料係が無機材料第一係と第二係に分離し、庶務課(庶務係、経理係)、調査課(技術係、地盤沈下調査係)、研究課(無機材料第一係、第二係、有機材料係)、機械整備課(業務係、整備係)の4課9係になる |
| 36年 (1961) | 戸田橋地盤沈下 観測所設置 | 昭和36年(1961)6月、板橋区船渡町(現 船渡4-14-12)に地盤沈下観測井第1観測所(深さ290m)を設置、昭和36年(1961)10月、第4観測所(深さ27m)、第2観測所(113m)を設置 |
| 37年 (1962) | 戸田橋実験場 | 昭和37年(1962)12月、試験舗装用のコンクリート製テストピットを設置 |
| 39年 (1964) | 機構改革 部・室制 | 昭和39年(1964)8月1日、機構改革により機械整備課を分離、研究部門が部・研究室制となり、庶務課(庶務係、経理係)、技術部(道路構造研究室、舗装研究室、河川研究室)、地象部(地盤沈下研究室、測地研究室、地質研究室)、材料部(材料研究室、コンクリート研究室、アスファルト研究室)の1課・3部・2係・9研究室を置く |
| 40年 (1965) | 戸田橋分室 (舗装研究室) | 昭和40年(1965)9月、地盤沈下観測用庁舎の一部を舗装室内実験室に改造して戸田橋分室として舗装研究室が常駐 |
| 42年 (1967) | 両国分室 防災研究室 タール研究室 | 昭和42年(1967)4月、千歳町分室の測量研究室と芝浦庁舎の地盤沈下研究室が合流して両国分室に移転(推定) 昭和42年(1967)7月、地象部に防災研究室、材料部にタール研究室を設置、1課・3部・2係・11研究室となる |
| 44年 (1969) | 研修課 | 昭和44年(1969)4月、研修課の新設 |
| 49年 (1974) | 研究室制廃止 | 昭和49年(1974)7月1日、研究組織の変更により研究室を廃止、各研究室には研究課題に応じて主任研究員を置く。また、所長による特命課題を研究するための副参事研究員を置く。2課・3部・1副参事研究員・2係5主査・11主任研究員となる |
| 52年 (1977) | 建試協 | 昭和52年(1977)2月2日～3日、地方公共団体建設技術試験研究機関連絡協議会(略称、建試協)設立総会開催 |
| 54年 (1979) | 土研情報 | 昭和54年(1979)4月28日、けんせつ局報に土研情報を掲載開始 |

| | | |
|-----------------|--------------------------|---|
| 昭和56年 (1981) | 研修課移転 | 昭和56年(1981)4月、研修課が建設局職員研修所(新宿区大久保3-10-1)に移転 |
| 58年 (1983) | 戸田橋分室移転 | 昭和58年(1983)5月、戸田橋分室の舗装研究室が芝浦庁舎に移転 |
| 60年 (1985) | 公共基準点 | 昭和60年(1985)4月、東京都公共基準点整備事業の開始 |
| 61年 (1986) | 両国分室移転 研修課廃止 材料部廃止 | 昭和61年(1986)2月、両国分室(地盤沈下研究室、測地研究室)が芝浦庁舎の隣接地に移転 昭和61年(1986)3月31日をもって研修課が廃止 昭和61年(1986)8月31日をもって材料部が廃止、材料部で行っていた土木材料試験業務は東京都駐車場公社土木材料試験センターに移管 |
| 平成3年 (1991) | 庁舎移転 | 芝浦庁舎の敷地が下水道局芝浦処分場の拡張用地になったため、平成3年(1991)7月1日、庁舎を港区港南から江東区新砂一丁目9番15号に移転 |
| 6年 (1994) | 施工管理研究 | 平成6年(1994)、施工管理研究を新設 |
| 8年 (1996) | 構造研究 内部評価制度 | 平成8年(1996)、構造研究を新設 平成8年(1996)10月、建設局調査研究評価委員会が設置され、調査研究課題の内部評価制度を設ける |
| 11年 (1999) | 外部評価制度 | 外部の専門家、有識者、都民委員等からなる「土木技術研究所評価委員会」を設置し、平成11年(1999)9月16日、第1回評価委員会を開催 |
| 12年 (2000) | LAN | 平成12年(2000)8月に所内にIT委員会を設置し、同年12月から所内にLAN(ローカルエリアネットワーク)立上げ |
| 13年 (2001) | ホームページ | 平成13年(2001)5月、東京都土木技術研究所のホームページを開設 |
| 14年 (2002) | グループ制 | 平成14年(2002)4月から研究組織をグループ制とし、道路環境グループ(道路、舗装、化学)、河川環境グループ(河川、緑化)、材料施工グループ(材料、施工管理)、地盤環境(地盤環境、地質地下水、地盤情報)測地グループ(水準、公共基準)、地震防災グループ(防災、構造)になる |
| 16年 (2004) | 土研ニュースレター | 平成16年4月6日、「土研ニュースレター」の発行を開始 |
| 17年 (2005) | 廃止方針 | 平成17年(2005)5月、土木技術研究所廃止の方針が出される |
| 18年 (2006) | 東京都土木技術センター | 「東京都土木技術研究所」が廃止され、平成18年(2006)4月1日、「東京都土木技術センター」が技術支援課と技術調査課の2課・8係・4担当体制で発足 平成18年(2006)8月22日、「センターニュースレター」の発行を開始 |
| 19年 (2007) | アーカイブス担当廃止 | 平成19年(2007)3月31日をもって技術支援課アーカイブス担当が廃止 |
| 20年 (2008) | 技術調査課廃止 | 平成20年(2008)3月31日をもって技術調査課が廃止、1課・5係・5担当になる 平成20年(2008)6月26日、「土木技術センターニュース」の発行を開始 |
| 21年 (2009) | 東京都土木技術支援・人材育成センター | 平成21年(2009)4月1日、土木技術支援・人材育成センターに改称、人材育成係新設、1課・6係・5担当になる 平成21年(2009)7月10日、「センター技術ニュース」の発行を開始 |
| 22年 (2010) | 技術研修担当 | 平成22年(2010)4月1日、技術研修担当を新設、1課・6係・6担当になる |
| 25年 (2013) | 液状化予測図HP公開 | 平成25年(2013)3月、液状化予測図(平成24年度改定版)作成、関係機関に配布、センターホームページ上でも公開 |
| 26年 (2014) | 東京の地盤(GIS版)HP公開 | 平成26年(2014)4月、センターホームページで東京の地盤(GIS版)を公開 |
| 30年 (2018) | 戸田橋実験場改修 | 平成30年(2018)3月、戸田橋実験場の全面改修を行い、新実験棟の運用を開始 |
| 令和4年 (2022) | 液状化予測図と東京の地盤HP創立100周年 | 令和4年(2022)3月、ホームページの東京の液状化予測図(令和3年度改訂版)と東京の地盤(改訂GIS版)を改訂 令和4年(2022)4月4日、創立100周年を迎える |
| 令和6年 (2024) | 人材育成担当と技術研修担当廃止・移管 | 令和6年(2024)4月1日、人材育成担当と技術研修担当が廃止され総務部職員課に移管、1課・10担当になる |

3 組織及び分掌事務

所 長

技術支援課長

| | |
|-------------|---|
| 管理担当 | 人事・服務、給与・福利厚生、健康管理、広報・広聴、文書、財産・庁舎管理、被服・保護具、防災関係及び他の担当に属さないこと |
| 経理担当 | 予算・決算、歳入・歳出、工事請負・委託及び物品契約、指名選定委員会事務、物品管理、特別出納員事務、監査・検査及び自己点検に関すること |
| 技術情報担当 | 技術情報の蓄積・保管及び発信、土木技術講習会（土木技術研修）の企画・調整・実施に関する事、 「東京 橋と土木展」の企画・調整・実施及び土木学会（土木コレクション）との連携に関する事、東京都立大学との連携事業に関する事、土木技術情報ライブラリーに関する事 |
| 新技術情報担当 | 新技術評価選定及び活用支援、工所用材料の調査、東京都技術情報連絡会及び地方公共団体建設技術試験研究機関連絡協議会に関する事 |
| 地下水・基準点情報担当 | 公共基準点及び水準基標の整備・維持管理・占用申請、公共基準点・水準測量及び測量全般に係わる技術支援、公共基準点（1級）・水準測量成果・データの提供、地下水・地盤沈下の観測及びデータベース化等に関する事 |
| 技術支援担当 | 技術支援の総合調整・進行管理、進行管理及び企画運営会議、関係部署との調査・開発調整会議、事業計画の策定、年報の編集、土木材料仕様書の改定、センターニュース及び発表会に関する事 |
| 材料施工担当 | 材料施工に係る技術支援、防水性能を有した薄層増厚工法による床版補修工法の開発等の材料施工に関する調査・開発、新技術評価委員及び材料施工に係る委員会等、技術提案型総合評価検討部会及び戸田橋実験場に関する事 |
| 河川・緑化支援担当 | 河川・緑化に係る技術支援、局技術研修等講師、都市河川の降雨量、水位、流量観測に関する調査・開発、河川における水質浄化の抜本的な対策及び工事監督補助業務に関する技術者等認定に関する事等に関する事 |
| 道路環境支援担当 | 道路環境に関わる技術支援及び委員会、路面温度上昇抑制機能のある舗装及び騒音低減機能を有する道路舗装やCO2排出抑制効果を有するアスファルト混合物等に関する調査・開発、道路舗装に関わる研修講師、誘導シートのすべり対策調査に関する事 |
| 地盤・地質担当 | 地盤地質に係る技術支援、河川別地盤・地質断面図の作成及びデータベース化、地盤情報システムの充実と活用及び新地盤情報システムの構築、液状化予測システムの更新、東京の地盤（GIS版）の運用支援及び地盤地質等学会の委員等に関する事 |

4 職員配置表

(令和6年4月1日現在)

| 課 | 担当名 | 管理職 | | 一般職員 | | 合計 | 会計年度任用職員 | 総計 | 備考 |
|-------|-----------------------|-----|----|------|----|----|----------|----|----|
| | | 事務 | 土木 | 事務 | 土木 | | | | |
| 技術支援課 | | | 2 | 5 | 18 | 25 | 11 | 36 | |
| | 課長代理(管理担当) | | | 1 | | | | | |
| | 課長代理(経理担当) | | | 1 | | | | | |
| | 課長代理(技術情報担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(新技術情報担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(地下水・基準点 情報担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(技術支援担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(材料施工担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(河川・緑化支援担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(道路環境支援担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(地盤・地質担当) | | | | 1 | | | | |
| | 課長代理(課務担当) | | | | 2 | | | | |
| | 主任級以下 | | | 3 | 8 | | | | |

※課長代理は課の内数である。

5 予算及び決算

(単位:千円)

| 区 分 | 令和6年度予算額 | 令和5年度予算額 | 令和5年度決算額 |
|------------------|----------|----------|----------|
| 土木技術支援・人材育成センター費 | 258,395 | 260,000 | 224,425 |
| 技術支援 | 37,649 | 34,577 | 27,162 |
| 技術情報 | 216,796 | 213,242 | 188,187 |
| アーカイブス | 7,421 | 4,421 | 2,463 |
| 地下水 | 39,679 | 38,075 | 28,871 |
| 地盤情報 | 11,270 | 10,653 | 8,313 |
| 水準測量 | 84,450 | 80,479 | 77,756 |
| 公共基準点測量 | 44,024 | 42,694 | 40,287 |
| 液状化対策 | 29,952 | 36,920 | 30,497 |
| 新技術評価 | 3,950 | 4,464 | 3,470 |
| 土木技術研修 | — | 7,717 | 5,606 |
| 調査開発等に要する予算 | 223,879 | 255,473 | 135,075 |
| 建設局(各部より配付) | 223,879 | 236,095 | 118,575 |
| 道路管理部 | 134,179 | 139,095 | 65,944 |
| 道路建設部 | 0 | 0 | 0 |
| 公園緑地部 | 2,800 | 2,600 | 875 |
| 河川部 | 86,900 | 94,400 | 51,756 |
| 他 局 | 0 | 19,378 | 16,500 |
| 総務局執行委任 | 0 | 19,378 | 16,500 |
| 都市整備局執行委任 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | 482,274 | 515,473 | 359,500 |

備考 調査開発等にかかる委託料の予算額は、年度当初の予定額で計上。
令和6年度 土木技術研修等は、組織改正に伴い他部署へ編入。

Ⅱ 業務の内容

1 現場の技術支援

センターは、事業実施部署が計画、設計、施工、施設の維持管理までの各段階で直面する技術上の課題に対し、直接サポートして解決策を見出す技術支援を業務の柱のひとつとしており、現場と直結した技術支援組織として、事業実施部署の円滑、かつ確実な事業執行を支えている。

技術支援を行う対象は、建設局内のみならず都庁内の各局はもとより、国、区市町村等におよび、土木技術に関する相談、技術支援の要請に応じてきている。

土木行政における技術支援にあたっては、効率的かつ迅速に支援の成果を出すことを常に意識しつつ、センター自らの課題解決能力を高めていく。

(1) 重要な技術支援の取組

センターに要請された技術支援の中から、①局内外の主要事業、②技術的に困難な事業、③技術支援が長期にわたる事業、④社会的に影響が大きな事業について、特に重要な技術支援として選定し、より円滑かつ適切な支援が行えるよう取り組んでいる。

- ・西武新宿線連続立体交差事業シールドトンネル技術検討委員会への参加
- ・井の頭池流出量モニタリングの実施
- ・谷沢川分水路の整備・運用に係る検討委員会への参加
- ・地下水対策検討委員会への参加
- ・東京都地域危険度測定調査に関する技術支援
- ・関東地区地盤沈下調査測量協議会への参加 など

(2) 技術支援の事例

〔井の頭池の流出量の調査〕

井の頭池の水量・水質管理に資するため、神田川への流出量の連続計測や井の頭池周辺の地下水位の計測を実施している。

<水位、流速の計測>



2 事業計画に基づく調査・開発

建設局では、災害に強く、快適で利便性の高い都市を目指し、都市の動脈である幹線道路をはじめ、人に優しい歩行空間、水害から都市を守る河川、潤いや安らぎを創出するとともに防災機能を備えた公園など、都市基盤の整備を推進している。

センターでは、これらの施策実現に向けた課題解決を目的として、今年度は26のテーマを設定して、計画的・継続的に調査・開発に取り組んでいる。

(1) 調査・開発テーマ一覧

| | |
|---|--|
| 道管 1 騒音低減性能をもつ舗装の性能維持向上のための調査開発 | |
| | 優れた騒音低減性能をもつ二層式低騒音舗装の各種性能向上を図る。 <ul style="list-style-type: none">・二層式低騒音舗装用フィニッシャの老朽化に伴う、新たな二層式低騒音舗装の施工方法の検討・二層式低騒音舗装の舗装構造の検討・施工歩掛、日施工量等の検討 |
| 道管 2 騒音低減性能をもつ舗装の騒音評価方法の検討 | |
| | 現行の舗装路面騒音測定車にかわる騒音の評価方法について調査、検討する。 <ul style="list-style-type: none">・現行の騒音評価方法の調査・MWD（移動式たわみ測定装置）による舗装劣化の評価に関する検討・路面性状調査等との比較検証による MWD の適用性等の検討 |
| 道管 3 路面温度上昇抑制車道舗装の供用中の性能の持続性調査 | |
| | 車道舗装性能の継続調査を行い、維持管理・更新を行う上での基礎データを取得する。 あわせて遮熱性舗装について、すべり抵抗性について継続調査を実施する。 |
| 道管 4 路面温度上昇抑制車道舗装の技術調査 | |
| | 遮熱性舗装の剥離抵抗性能試験機に使用するタイヤの生産終了に伴う、代替試験方法等に関する検討を実施する。 |
| 道管 5 中温化技術を活用した舗装の品質検証 〈P13 概要〉 | |
| | 中温化剤等を用いた低炭素（中温化）アスファルト舗装の実道における運用方法や耐久性について検証を行い、実用化を図る。 <ul style="list-style-type: none">・中温化剤等を用いた低炭素（中温化）アスファルト舗装の品質検証と評価（性能、耐久性、コスト等を評価）・中温化技術を活用した混合物の及び性能指標や、性能を確認するための試験方法、運用方法などの検討 |

| | |
|-------|--|
| 道管 6 | <p>中温化技術を活用した舗装の技術調査 〈P13 概要〉</p> |
| | <p>低炭素（中温化）アスファルト舗装の性能評価手法を確立するとともに、実道に適用した場合の運用方法や耐久性について検証を行い、実用化を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・低炭素（中温化）アスファルト混合物の締固め性の確認および敷均し温度低減の可否を検討 ・中温化技術を活用した混合物の敷均し温度低減後の品質検証と評価（性能、耐久性等を評価） |
| 道管 7 | <p>舗装の維持管理に係る調査・設計手法等の検討</p> |
| | <p>舗装点検要領や ICT を活用した先進的技術動向を踏まえた形での舗装管理マニュアル（案）の見直しに向け技術的支援を実施する。</p> |
| 道管 8 | <p>舗装用アスファルトの品質検証に関する調査</p> |
| | <p>再生アスファルト混合物には、繰返し再生しても所定の性能と供用寿命の確保が求められるため、劣化の進行が緩やかと考えられる高針入度アスファルトの利用促進を図り、より供用寿命の長い再生技術を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試験施工箇所の路面性状等を追跡調査 ・調査結果の整理 |
| 道管 9 | <p>耐久性の高い舗装の技術調査</p> |
| | <p>近年、舗装混合物の技術の進歩により、高耐流動性のアスファルト混合物が各種開発されている。</p> <p>これらの基準化を図るとともに、従来から用いられてきた半たわみ性混合物との比較を行い、調査、検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホイールトラッキング試験の代替として、高耐流動性混合物の評価方法の検討 ・高耐流動性混合物の基準値の検討 ・半たわみ性混合物の技術整理（ポーラスアスコン母体への適用など） ・混合物の基準化案策定（試験方法と基準値案策定） |
| 道管 10 | <p>無電柱化の技術に関する検討</p> |
| | <p>電線共同溝の整備には、多額の費用が掛かることから、無電柱化が進まない要因の一つとなっている。</p> <p>このため、無電柱化推進条例に基づく新たな無電柱化推進に向けて、狭隘道路における無電柱化及びコスト縮減等の可能性やそのための技術的課題について調査、検討する。</p> |

| | |
|---|--|
| 道管 1 1 防水性能を有した薄層増厚工法による床版補修工法の開発 | |
| | <p>古い橋梁は現行基準と比較して床版厚が薄く耐荷性能が劣っており、また床版防水層の劣化等により所定の耐荷力や耐久性が期待できない状況が発生している。</p> <p>また、「鋼板接着補強 R C 床版の再損傷の点検手法と再補強技術開発」の調査開発成果により、雨水浸透した床版の耐久性は極めて低下することが分かっていることから、床版防水性能の向上を合わせ持つ補修・補強技術を開発する。</p> <p>令和 6 年度は 2 種類の薄層増厚材について、輪荷重走行疲労試験を実施する。</p> |
| 河川 1 都市河川の降雨量、水位、流量観測調査 〈P14 概要〉 | |
| | <p>中小河川の洪水対策や良好な河川環境創出をすすめるため、中小河川のハード・ソフト対策に必要とされるデータを得る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中小河川において洪水時等の流量を観測 ・ 河川水位、降水量等のデータを収集 ・ 上記データを用いて、降雨特性、水理特性、降雨流出特性等の分析 |
| 河川 2 河川工事等に伴う中小河川流域の地下水状況の把握 〈P15 概要〉 | |
| | <p>近年、都内の河川では、治水機能に加えて親水機能の向上が求められているが、武蔵野台地上の中小河川では、河川の水がなくなる「水涸れ」現象がしばしば発生し、水量の確保が大きな課題になっていることから、各種調査を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (空堀川流域) 水文環境の把握、観測井の設置、地下水位の長期観測とデータ蓄積等の実施による対策と効果検討の支援 ・ (野川流域) 観測井による地下水位の長期観測とデータ蓄積、地下水面図の作成等 |
| 河川 3 河川構造物の長期変状調査 | |
| | <p>大規模河川構造物（対象：地下調節池及び分水路の計 21 施設）における、ひび割れ等の定点観測結果から、各年における劣化進行状況を把握するとともに、施設の寿命についての設定方法等を検討することにより河川の安全性確保と最適な予防保全型維持管理の計画策定に寄与する。</p> |
| 河川 4 河川構造物の D E F 現象を考慮した長期耐久性の検証 | |
| | <p>DEF (Delayed Ettringite Formation) 現象は、打ち込まれたコンクリートの最高温度履歴、硫酸塩、水分供給の有無が影響するものであり、平成 28 年度には、ひび割れ防止指標が制定された。</p> <p>平成 30 年度に P C a 製品及び大規模河川構造物（地下調節池）と同配合、同温度履歴の供試体を作製し、今後 30 年間にわたり試験データを取得し、実構造物に変状が発生した際の原因特定や対策方法の検討、また今後のひび割れ制御設計等に生かしていく。</p> |

| | | |
|------|---|----------|
| 河川 5 | 河川別地盤・地質図の作成とデータベース化 | 〈P16 概要〉 |
| | センターが保有する地質データ等を活用し、都内の中小河川流域の地盤・地質構造の全体像を把握すると共に3次元地盤図を作成し、各種調査や検討に資する基礎資料とする。 | |
| 河川 6 | 河川施設のストック効果の算定環境整備の検討 | |
| | 大雨時の河川水位や浸水範囲を河川整備状況に応じて評価する環境を構築するための必要な支援を行う。 | |
| 河川 7 | 野川上流域の水文環境の検討解析 | |
| | 野川最上流域である鞍尾根橋から上流について、地元住民等より環境に配慮した護岸整備促進の陳情があり、令和4年第1回定例会において趣旨採択され、今後の対応として、降雨や水位上昇をモニタリングし、適切な時期に事業を実施することになった。このため、高水等の流量観測、河川水位、雨量、地下水位等の水文データを調査・収集して流出解析を行い、瀬切れ対策、地下水を含む流域の水文環境などの検討解析を行う。 | |
| 共通 1 | 新技術の評価選定と活用支援 | |
| | 民間等で開発された優れた新材料や新工法等の新技術情報を組織として共有し、工事に積極的に活用することにより、コスト縮減等、効率的・効果的な施工の実現を図ることを目的とし、新技術評価選定の制度を平成10年より運用している。引続き新技術評価選定会議の開催、登録技術の活用支援のための情報提供を行っていく。 | |
| 共通 2 | 地下水位等の観測とデータベース化 | |
| | <p>「東京都地域防災計画」、「東京都公害防止計画」、環境確保条例等に基づき、地盤や地下水位の状況を調査している。</p> <p>調査は、都内42箇所における観測井の地盤や地下水位の変動状況に加え、水準測量結果と合わせて地下水位及び地盤沈下の関係等を分析するものである。</p> <p>前年度の観測成果と地盤沈下等の経年変化については、「地盤沈下調査報告書」として取りまとめ、毎年公表する。</p> | |

| | |
|--|---|
| 共通 3 公共基準点及び水準点の整備と維持管理 | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・測量法第 41 条第 1 項に基づく国土地理院長の審査・承認を受け、国土調査法第 19 条 5 項指定と同等の精度を有する公共基準点網の整備を完了、東京都公共基準点（1 級基準点、575 地点）として維持・管理を実施 ・東京都地域防災計画の規定に基づき、地盤沈下の動態を監視するため、1 級水準測量を毎年実施し、広域的な地盤の変動量を把握（水準測量の成果については、「水準基標測量成果」として取りまとめ、毎年公表する） ・東部低地帯などにおける水防及び護岸や水門施設等の維持管理に資するため、河川堤防護岸高について定点での水準測量を毎年実施 ・総務局からの執行委任として、三宅島火山の動向調査に資するため、1 級水準測量を隔年で実施（次回は令和 7 年度に実施予定） |
| 共通 4 重要構造物の強震観測 〈P17 概要〉 | |
| | <p>地震時における橋梁・河川構造物等と地盤の動的性状を調査研究し、これらの耐震性強化を図り、震災防止に資することを目的として、東京都震災予防条例第 26 条（現在、震災対策条例第 12 条）に基づき、昭和 53 年から道路橋梁 12 地点、河川構造物 6 地点、土木技術支援・人材育成センター 1 地点の計 19 地点（加速度計台 42 台）で、強震計の観測業務を行っている。</p> |
| 共通 5 地盤情報システムの充実と活用 | |
| | <p>公共事業をはじめ、民間の建築工事などで実施された地盤・地質（ボーリング）データの収集、蓄積、解析、提供を行い、建設、環境及び防災行政に役立つ技術支援を行う。</p> |
| 共通 6 建設現場の生産性向上に資する技術調査 | |
| | <p>“i-Construction” の局事業への適用にあたり、都内特有の施工条件や規模等を十分に配慮した実施要領や ICT 舗装工等の積算基準の整備を行ってきた。</p> <p>令和 6 年度は、ICT 活用工事として橋梁上部工、橋脚・橋台工、小規模土工（100 m³以下）について、実施要領の改訂等を予定している。</p> <p>引続き国の動向を注視し、局の要領・基準類等の整備や局内各部署、業界団体等と情報や課題を共有し、ニーズとシーズのマッチングを図ると共に、局内への情報発信や技術研修等による ICT 教育を進める。</p> |
| 共通 7 東京の液状化予測図の更新 〈P18 概要〉 | |
| | <p>公共事業のボーリングデータに加え民間から収集したボーリングデータ（約 7 万 6 千本）を活用し、約 9 年ぶりに液状化予測図（令和 3 年度改訂版）を更新した。現在、ボーリングデータ（約 8 万 3 千本）を活用した予測図（令和 5 年度改訂版）を HP で公開している。</p> <p>今後も継続的に収集される地盤データを活用し、適宜、予測図の更新を図り、都民に対して最新の地盤情報を反映した液状化予測図を提供していく。</p> |

道管5 中温化技術を活用した舗装の品質検証

道管6 中温化技術を活用した舗装の技術調査

1 調査開発の目的

- ・ 地球温暖化抑止に資する舗装技術として、アスファルト混合物の製造温度を低下できる中温化技術があげられている。
- ・ この中温化技術を適用した舗装の規格値や性能評価手法を確立するとともに、実道に適用した場合のCO₂ 排出抑制効果を確認し、現場適用が可能な環境整備を図ることを目的とする。

2 前年度までの成果

- (1) CO₂ 排出抑制機能を有する舗装技術として、東京都が実行可能なメニューを調査し、提案
⇒ CO₂ 排出抑制機能を有する舗装技術を調査し、実行可能なメニューとして中温化技術を活用した舗装や常温混合物、セメントコンクリート舗装などがあることを確認
- (2) CO₂ 排出抑制機能のある舗装材料を評価（性能、耐久性、コスト等）を評価
⇒ 車道に適用可能な舗装技術のうち、特に中温化技術を有用と評価
 - ・ 室内における物性試験の結果から、概ね現時点における中温化技術は各種基準を満たしており、性的に問題がないことを確認
 - ・ 現道において試験施工を実施（機械式フォームド方式、新材）し、品質を検証
 - ・ 新材に続き、再生材についても試験施工を実施、品質を検証
- (3) 試験施工結果を踏まえ、実用化に向けて事前審査委員会へ付議
⇒ 中温化技術を活用した機械式フォームド方式の新材・再生材を東京都土木材料仕様書に規定
 - ・ アスファルト混合物事前審査委員会により承認

3 令和6年度の実施計画

- (1) 低炭素（中温化）アスファルト混合物の室内試験等の実施と検討
 - ・ 中温化剤等を用いた低炭素（中温化）アスファルト混合物について、混合物種類ごとの物性値を調査
- (2) 現道における試験施工の調査（追跡調査）
 - ・ 試験施工箇所における路面性状の追跡調査を実施

4 令和6年度の成果・調査開発の最終成果予定

- (1) 令和6年度の成果
 - ・ 低炭素（中温化）アスファルト混合物の技術検討結果のとりまとめ
- (2) 最終成果
 - ・ 東京都として実行可能なCO₂ 排出抑制機能を有する舗装を提案
 - ・ 再生材を用いた低炭素（中温化）アスファルト混合物を使用した舗装の普及・展開に向けた技術のとりまとめ、基準化

5 局事業への活用・効果

- ・ 低炭素（中温化）アスファルト混合物を適用することにより、地球温暖化抑制に向けた低炭素社会の実現に向けて貢献できる。

河川 1 都市河川の降雨量、水位、流量観測調査

1 調査開発の目的

中小河川の洪水対策や良好な河川環境創出をすすめるには、各河川の水理的な特性や降雨流出特性の把握が必要となる。本調査開発は流量・水位・雨量等のデータ収集・蓄積や各種河川特性の解析によって、中小河川のハード・ソフト対策に必要とされるデータを得ることを目的とする。

2 前年度までの成果

流量観測調査の実施や計測機器の設置により、雨量・水位・流量等のデータ収集を行っている。また、収集したデータをもとに、河川の水理特性や流出特性、降雨特性等の検討を行っている。

3 令和6年度の実施計画

神田川、妙正寺川、善福寺川、石神井川、野川、仙川、境川において流量観測調査を実施すると共に、河川水位・雨量等のデータ収集を行う。また、収集したデータをもとに、河川の水理特性や流出特性、降雨特性等の検討を行う。

4 令和6年度の成果・調査開発の最終成果予定

流量・水位・降水量等のデータの整理蓄積とともに、河川の各種特性の検討をすすめる。

5 局事業への活用・効果

蓄積しているデータは、中小河川の計画策定時や流域治水対策の検討時における降雨特性検討、また調節池等の施設整備に際して水理特性検討等に用いられている。加えて、洪水予報等のソフト対策においても活用されている。

流量観測の状況



低水流量観測(晴天時)



高水流量観測(雨天時)

河川2 河川工事等に伴う中小河川流域の地下水状況の把握

1 調査開発の目的

- (1) 近年、都内の河川では、治水機能に加えて親水機能の向上が求められている。その一方で、空堀川や野川など武蔵野台地上の中小河川では、河川の水がなくなる「水涸れ」現象がしばしば発生し、水量の確保が大きな課題になっている。
- (2) 一般に河川は、流域の地下水と交流関係にあることから、河川整備事業の推進にあたっては、流域の地下水の動向を把握することが必要である。河川部及び関係事務所からは、「水涸れ」対策への技術的助言や情報提供が求められており、地下水の動向を把握する各種調査を実施し、必要なデータを収集して地下水位と河川流量の関係把握につなげる。

2 前年度までの成果

「河川の水量確保等に関する検討」として、空堀川及び野川において流域の地下水の状況を把握するための各種調査を実施した。

(1) 空堀川流域

- ① 中流域では、北北建が新設した観測井について、設置位置・深度・ストレナ位置の決定など、観測井の施工方法に関する技術支援を行った。
- ② 上流域で、観測井の整備と既存民間井戸を活用して、地下水位の連続観測と一斉測水等を実施し、地下水面図などから、流域の浅層地下水の流れの特徴や空堀川河床との関係等を把握できた。今後、上流域でさらに調査を進めることにより、浅層地下水の状況等を考慮した河床整備工事を進める上で、水量確保策に活用できるデータの整備を進める。

(2) 野川地域

- ① 上流域では、野川流域連絡会において、長期観測の結果や最新の状況等を報告した。その後、主要な観測井について連続観測を継続している。
- ② 一部の区間では、通年で地下水位が河床より低いことを明らかにし、粘土張りの必要性の検証および必要範囲等を提案した。
- ③ 下流域では、河床掘削工事の進捗に合わせて、観測井の整備と地下水位の連続観測・一斉測水を実施し、地下水面図等を作成した。
- ④ 地下水位の長期観測を継続して水量確保策の検討や効果の検証に資するデータを蓄積する。

3 令和6年度の実施計画

空堀川流域、野川流域において、観測井による地下水位の観測を行う。

4 令和5年度の成果・調査開発の成果

空堀川地域、野川流域において、水量確保の対応策・方針等の検討や効果の検証に資するデータの蓄積を行っている。

5 局事業への活用・効果

- (1) 中小河川流域の地下水に関する専門的助言及び調査結果等の情報提供により、「水涸れ」に対応した河川整備とその維持管理に貢献できる。
- (2) 「水涸れ」を心配する住民等に対して、正確なデータと対応策の提示が可能となり、事業への理解と円滑な事業執行が図れる。

河川5 河川別地盤・地質図の作成とデータベース化

1 調査開発の目的

中小河川流域では、50 ミリ対応の河床掘削に伴う水涸れや井戸枯れの表面化、河川整備工事に伴う家屋被害等が発生する場合がある。このため、地質縦・横断図等の作成により河川流域における地盤構造を解明し、水涸れ防止対策や家屋損賠等の基礎資料とすることを目的とする。

2 調査開発の概要

センターが保有する地質データ等を活用し、都内の中小河川流域の地盤・地質構造の全体像を把握すると共に3次元地盤図を作成し、各種調査や検討に資する基礎資料とする。

3 令和6年度の実施計画

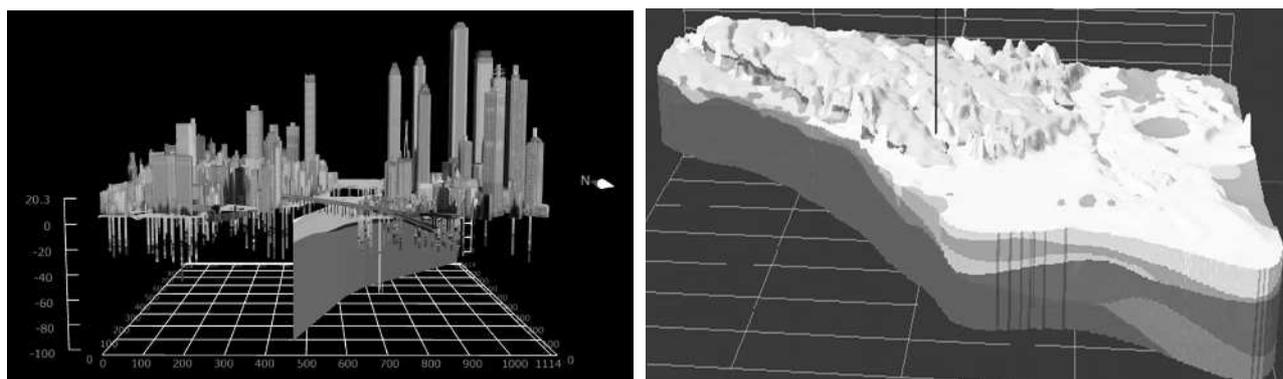
- (1) 3次元地盤図の作成
- (2) ユーザーテスト等を含むWEB公開準備

4 成果・調査開発の最終成果予定

- (1) 各種調査・検討に資する基礎資料の提供
- (2) 3次元地盤図のWEB公開

5 局事業への活用・効果

- (1) 概略設計等への活用
- (2) 関係機関協議、事業説明等、コミュニケーションツールとしての活用
- (3) ボーリング調査の位置決定、調査結果の精査
- (4) 3次元設計図面（BIM/CIM）との統合による設計・施工・維持管理分野への活用
- (5) 局内外のBIM/CIMおよびDXの推進



3次元地盤図 ※

※ 山地部（多摩西部および島しょ部）を除く都内全域の3D地盤図を令和7年度にWeb公開予定

共通 4 重要構造物の強震観測

1 調査開発の目的

建設局では、東京都震災予防条例第 26 条(昭和 46 年)(現在、震災対策条例第 12 条(平成 12 年))に基づき、地震時における構造物(橋、堤防及び水門)と地盤の動的性状を調査研究するために資料を収集し、土木構造物等の耐震性強化を図り、震災防止に資することを目的に、昭和 50 年から強震観測を行っている。観測当初は、各建設事務所が強震記録の回収と保守点検を行っていたが、昭和 53 年から当センターで一元管理している。

2 前年度までの成果

- (1) 強震記録の回収・解析
- (2) 強震計の保守点検
- (3) 強震記録のセンターHP・年報への掲載
- (4) 強震観測事業推進連絡会議へのデータ提供
- (5) 震度の大きな地震での強震記録・解析結果の事業部(道路管理部・河川部)への報告(強震速報)

3 令和 6 年度の実施計画

- (1) 強震計の保守点検
- (2) 強震記録の解析
- (3) 強震計の更新(計画・設計)に関する支援

4 成果・調査開発の最終成果予定

- (1) 令和 5 年度の成果
強震計の保守点検とデータ回収・解析及び強震計の更新に係る支援
- (2) 最終成果
強震計の確実な保守点検と強震記録の回収・管理及び強震記録の公表

5 局事業への活用・効果

- (1) 橋梁・河川構造物の耐震性評価のための基礎資料の提供
- (2) 橋梁・河川構造物の地震被災時における原因究明等に必要となる基礎資料の提供



橋脚の強震計(佃大橋)



地盤の強震計



強震計本体

共通 7 東京の液状化予測図の更新

1 調査開発の目的

東京都では、1987年（昭和62年）3月に「東京低地の液状化予測」を初刊し、その後も多摩地域や港湾地域へ範囲を拡大しながら、液状化予測に関する情報の公開等に取り組んできた。令和3年度、公共事業のボーリングデータに加え民間から収集したボーリングデータ（約7万6千本）を活用し、約9年ぶりに液状化予測図を更新した。現在、ボーリングデータ（約8万3千本）を活用した予測図（令和5年度改訂版）をHPで公開している。

今後も適宜、液状化予測図の更新を図り、都民に対して最新の地盤情報を反映した液状化予測図を提供していく。

2 調査開発の概要

継続的に公共および民間の地盤データを収集し、適宜、液状化予測図の更新を図り、都民に対して最新の地盤情報を反映した液状化予測図を提供する。

3 令和6年度の実施計画

- (1) 地盤データの収集・整備
- (2) 「東京の液状化予測図（令和7年度改訂案）」の作成

4 成果・調査開発の最終成果予定

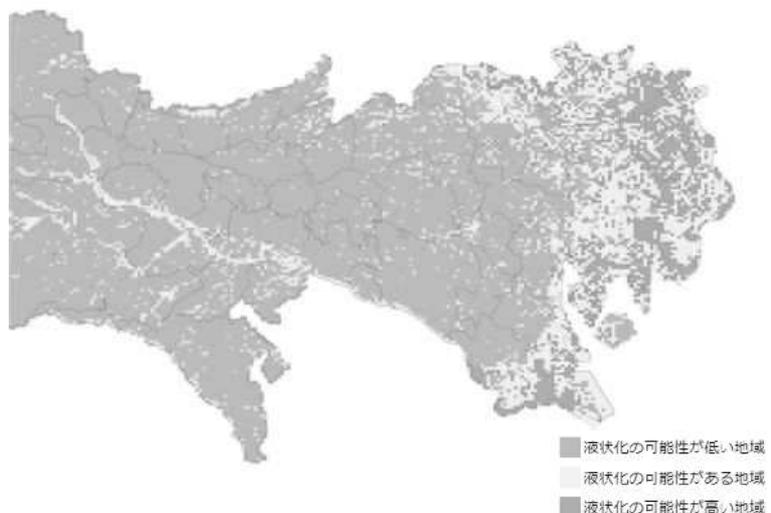
継続的に収集されるボーリングデータを用いた液状化予測図の適宜更新及びHP公開

5 局事業への活用・効果

- (1) 継続的に収集されるボーリングデータによる液状化予測図更新により最新の情報提供が可能
- (2) 都民に対して、よりきめ細かな情報提供により液状化対策に関する意識を啓発



東日本大震災で発生した液状化の様子



液状化予測図(令和5年度改訂版)

3 技術情報の蓄積と提供

センターにおいては、旧研究所時代から地盤情報、河川水位・流量や地下水位などの観測及び水準測量や公共基準点の計測等を継続して行っており、得られた数値情報や解析結果などを広く都民などに提供している。

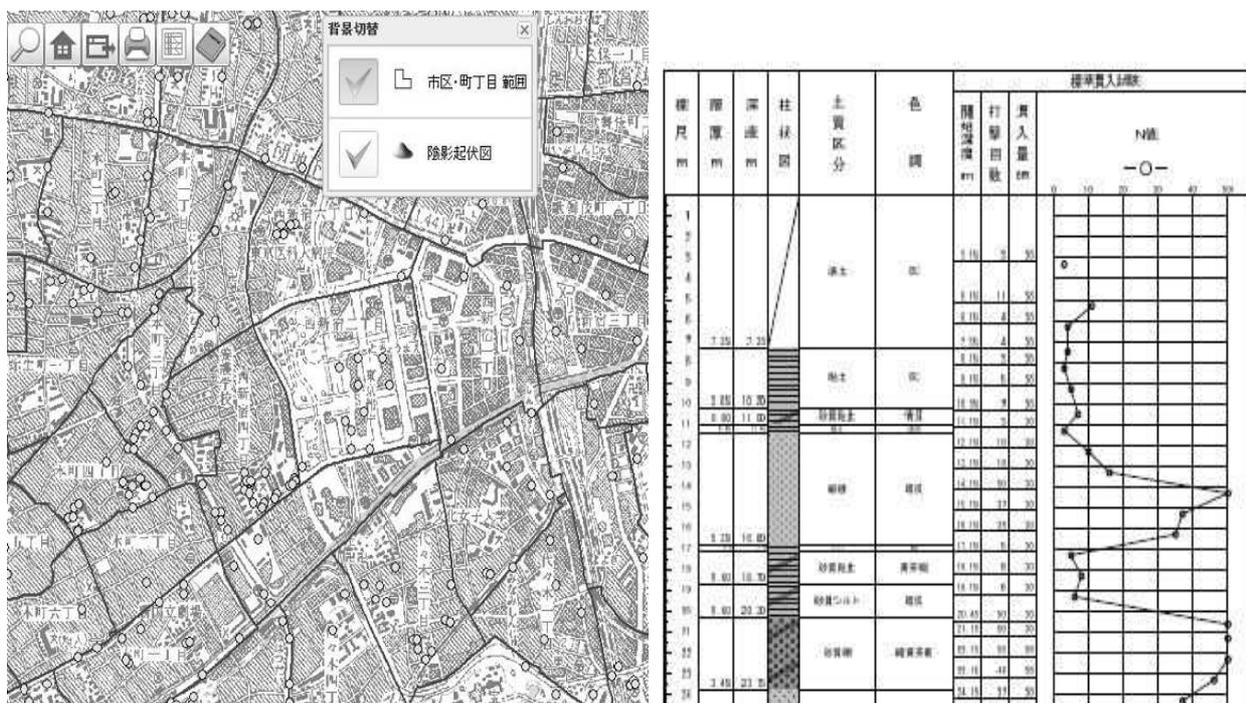
(1) 地盤情報データの蓄積と提供

地盤情報システムは、庁内各局をはじめとする建設事業などで実施された地盤・地質に関する調査資料のデータベース化を行い、当センターの調査・開発に利用するとともに、都の建設・防災・環境行政等における地盤情報の迅速な提供を目的として構築されている。このシステムでは、地形、地質、土質等の地盤に関連する情報の収集、管理、検索、図化、解析、情報提供まで一貫した運用・維持管理を行っている。

最近 10 年の情報提供は年間約 150 件であり、新規に実施する地質調査のコスト縮減や工期短縮に貢献している。

平成 18 年度末からは、都民向けに公共工事に伴う地質柱状図をインターネット上で公開してきた。平成 26 年 5 月には、都市整備局の「建物における液状化ポータルサイト」と当センターの「東京の液状化予測図」とを連携し、相互リンクや住所検索が可能なシステムに機能向上した。また、令和 4 年 3 月 29 日から二次利用可能なデータ（オープンデータ）を提供するため、ホームページ「東京の地盤」からボーリング柱状図や土質試験結果（XML 形式）をダウンロードできるように変更した。

現在までに収集し、公開している地質（ボーリング）データは約 2.8 万本、また HP のアクセス数は約 12 万件/年（令和 5 年度実績）であり、引き続きデータを収集・充実し、都民サービスの向上を図っていく。



東京の地盤（GIS版）

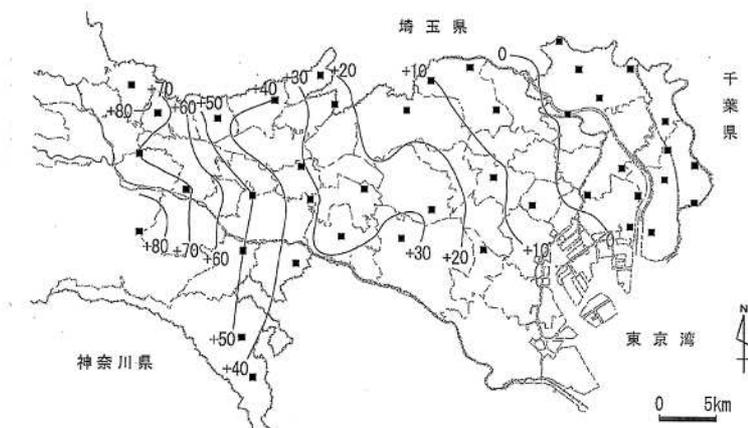
(2) 地盤沈下・地下水位データの蓄積と提供

地盤沈下の主因である地下水位の変動状況と、地下のどの部分が収縮しているかを明らかにするために、都内 42 箇所に観測井を設置している。観測結果は、「水準基標測量成果」と合わせて東京都における各種地盤沈下対策の基礎資料になるとともに、地下構造物設置の際や学術的にも貴重な資料として各方面に広く利用されている。また、「地盤沈下調査報告書」として公表するとともに、ホームページで公開している。

(ホームページアクセス数: 約 6 千件/年、令和 5 年度)。

地下水位の観測については、テレメータシステムによる自動観測を行っている。

また、平成 23 年度からは観測補助局として、河川部所管事業との連携を図り、大深度地下構造物の施工に伴い設置した地下水観測井等を活用し、事業への技術支援を行うとともに地下水位データの補完を進めている。

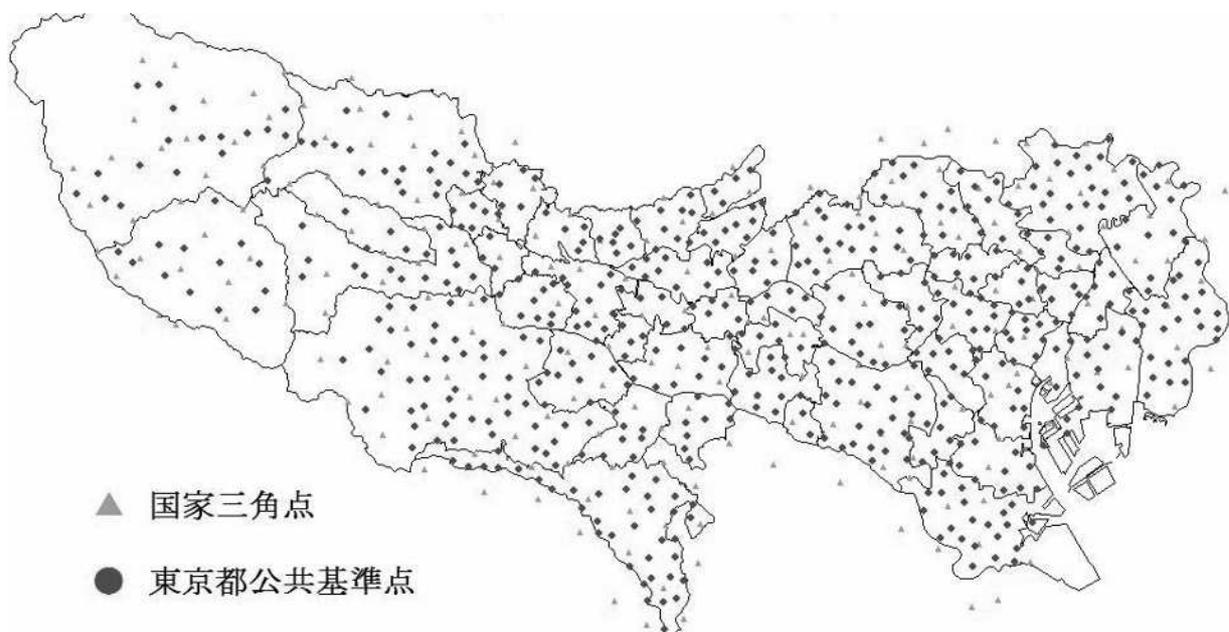


令和 4 年末の地下水位等高線図 (単位: T. P. m)

(3) 東京都公共基準点 (1 級) の整備・維持管理と提供

公共測量の基本データとして都市基盤整備の円滑化を図るため、昭和 60 年より「東京都公共基準点」(1 級基準点: 575 地点、島しょ部を除く都内全域、標準点間距離 約 1.5km) の整備・維持管理を行っている。

平成 25 年度には、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う地殻変動に対応し、東京都公共基準点を改測・改算し公表した。



東京都公共基準点整備状況図

過去5年度の登録件数については、令和元年度で5件、令和2年度で12件、令和3年度で6件、令和4年度で6件、令和5年度で3件となっている。

NeTIDa に登録された新技術は、概ね登録の翌年度に、都庁内で職員向けに「新技術展示会」を開催している。開催方法は、会場内を分割して参加される提案者にスペースを割り当て、提案者がスペースの中で新技術に関する「説明パネル」「模型」「実物」などの展示物を準備していただき来場する職員に対し直接説明を行っている。

令和5年度登録 新技術

| | |
|------------------------|-----------------|
| 2023001 | 高含水泥土改良剤 MTシリーズ |
| 高含水泥土を改質し即時搬出するための改良剤 | |
| 2023002 | スーパーシナヤカファルト |
| 長寿命・低炭素舗装用ポリマー改質アスファルト | |
| 2023003 | FRPシップ工法 |
| 照明灯ポール等の鋼管柱の補修工法 | |



「令和5年度 新技術展示会」開催状況

(8)「東京の液状化予測図」の提供

地盤の液状化現象は、ゆるい砂層が分布した地下水位の浅いところで発生する可能性が高いことから、一般的には沖積低地や旧河道、湿地、河川敷などで発生しやすいことが知られている。

東京都では、東部低地を中心とした液状化調査や、地盤情報のボーリング柱状図等など既存データベースを活用し、関東大地震（大正12年9月1日）規模の地震が発生したときの液状化の発生しやすさを都内全域について地図化した「東京の液状化予測図」を作成し、平成17年度からインターネット上で公開している。

平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震に際しては、都内でも昭和30年代以降の埋立地を中心に液状化が発生し、木造の戸建住宅に傾斜するなどの被害が発生した。このため、港湾地域も含めて予測図を見直し、「東京の液状化予測図（平成24年度改訂版）」として、各区市や都民情報ルームに配布するとともに、インターネット上でも公開した。

令和4年3月には、公共事業のボーリングデータ（約2万本）と民間のボーリングデータ（約7.6万本）を活用した「東京の液状化予測図（令和3年度改訂版）」を9年ぶりに更新した。また、この更新に合わせ二次利用可能なデータ（オープンデータ）を提供するため、ホームページ「東京の液状化予測図」から予測に用いた地盤情報や液状化履歴等に関する情報（Shape形式）をダウンロードできるように変更した。

現在、ボーリングデータ（約8万3千本）を活用した予測図（令和5年度改訂版）をHPで公開しており、アクセス数は約21万件/年（令和5年度実績）となっている。

○ 液状化予測図の作成・公開等の経緯

- ①東京低地の液状化予測図（昭和62年）
- ②東京港埋立地盤の液状化予測図（平成2年度）
- ③武蔵野台地・多摩丘陵での液状化の検討（平成8年度）
- ④上記3つの予測図を「東京の液状化予測」に統合（平成9年度）
- ⑤「東京の液状化予測図」のインターネットでの公開開始（平成17度）
- ⑥「東京の液状化予測図」の見直し（平成23年度～平成24年度）
- ⑦「東京の液状化予測図（平成24年度改訂版）」をインターネットで公開
- ⑧「東京の液状化予測図（令和3年度改訂版）」をインターネットで公開
- ⑨「東京の液状化予測図（令和5年度改訂版）」をインターネットで公開

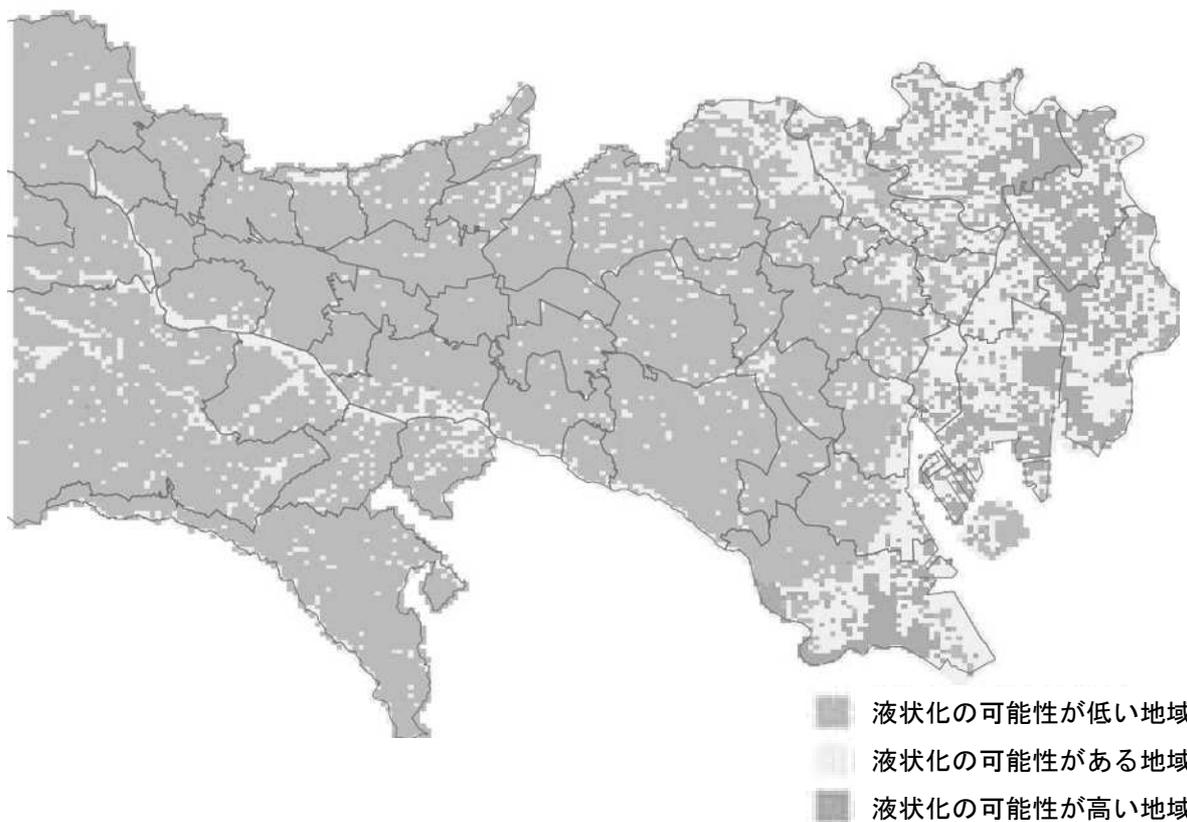
液状化予測手法

ボーリングデータ
(蓄積データ約7.6万本)

5つの地図データ

- ・液状化履歴図
- ・土地条件図
- ・水系変遷図
- ・湿地・水田分布図
- ・埋立材区分図

| | | ボーリングデータ | | |
|------|---|----------|---|---|
| | | 液状化の可能性 | | |
| | | 大 | 中 | 小 |
| 地図情報 | 大 | | | |
| | 中 | I | | |
| | 小 | | | |



東京の液状化予測図（令和5年度改訂版）

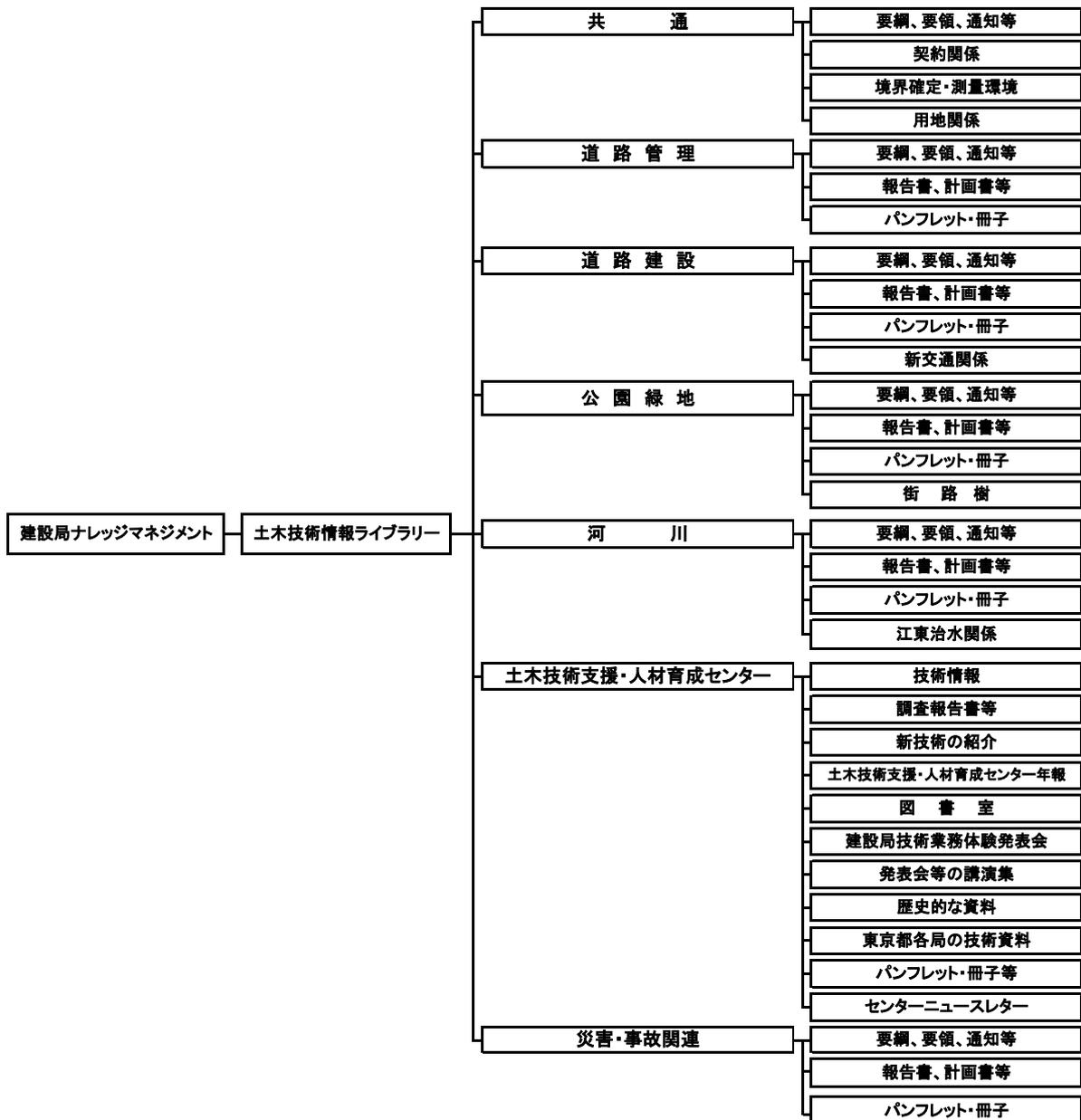
4 土木技術情報ライブラリー

土木技術支援・人材育成センターでは、技術の継承とこれまで各部所で蓄積されてきた各種技術資料を効率的に活用し、事業執行に役立てることを目的として、建設局ナレッジマネジメント内に土木技術情報ライブラリーを運営している。

建設局職員は、技術情報が集約化された土木技術情報ライブラリーから、パソコンで、より簡単に迅速かつ確実に必要な技術情報を入手し、業務の執行に活用することが可能となっており、活用しやすいように体系的・時系列的に整理・分類のうえ掲載している。

また、局内で保管・保存されてきた貴重な設計原図などの土木史料や昭和の初め頃の道路、橋梁、公園、河川の写真なども収集しており、これらの技術情報を、当センターの一般公開（年2回）、「東京 橋と土木展」、センターアーカイブ展などの機会を利用し都民等へ公開を行っている。

土木技術情報ライブラリーの体系図



(1) 土木技術情報ライブラリーからパソコンで入手できる技術資料

①建設局事業を都民等へ説明するための「パンフレット・冊子」

「神田川・環状七号線地下調節池」



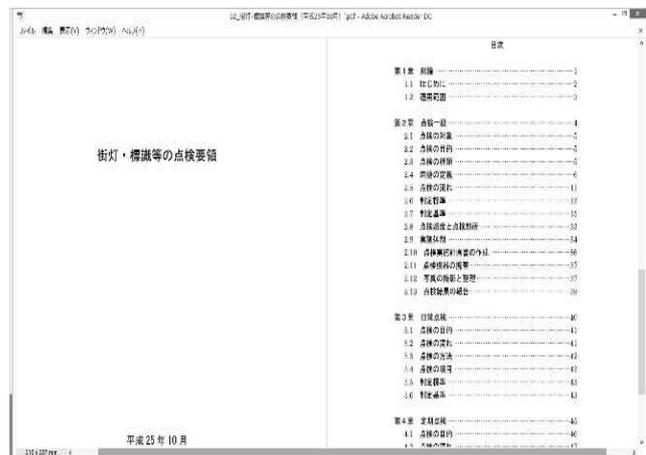
②土木技術センターで調査・蓄積している業務執行の基礎資料となる「地盤情報、液状化予測図、地盤沈下調査、公共基準点、等の技術情報、新技術情報、専門図書リストと貸出」

「東京都内の地盤情報が一目で見られます」



③過去における設計、工事及び維持管理等の「要綱、要領、通知等」

「街灯・標識等の点検要領(平成25年)」

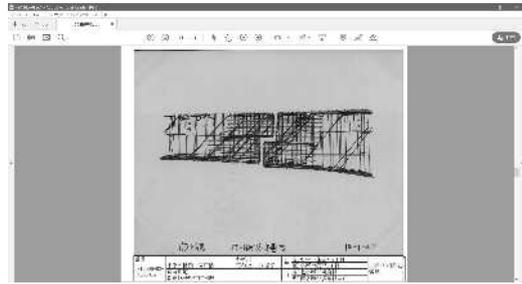


④歴史的な資料

[道路・橋梁の写真]

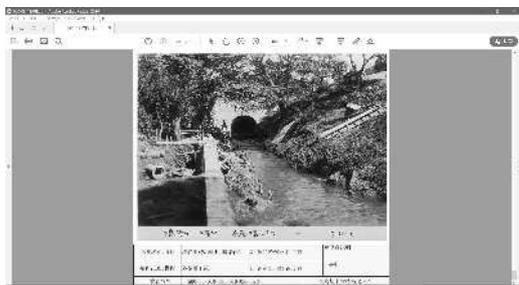


墨堤通り (昭和12年)



関戸橋 桁鉄筋模型 (昭和12年)

[河川の写真]



渋谷川 工事中 外苑橋下流 (昭和7年)



渋谷川 氷川橋上流 (昭和15年)

[公園の写真]



御岳景園地 富士峰 野遊場 (昭和14年)



江戸川風致地区水元公園ほか (昭和8年)

[工事中 工事後 明治通り 環五の1]



工事中 迂回道路附近地 (昭和7年)

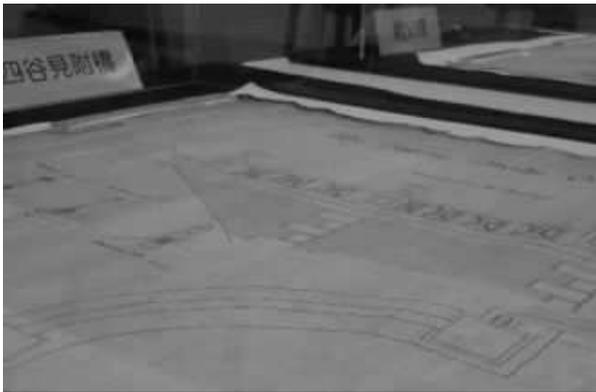


鬼子母神裏より南方迂回道路を望む (昭和8年)

⑤東京都技術情報連絡協議会を通じた「東京都各局の技術情報」

土木技術情報ライブラリー掲載資料は、令和6年4月現在、要綱・要領・通知等、報告書・計画書及びその他・講演集・パンフレットなど、約9千件におよび、東京都技術情報連絡協議会（データベース）を通じてそのうち2千件余りの技術情報を各局で共有している。

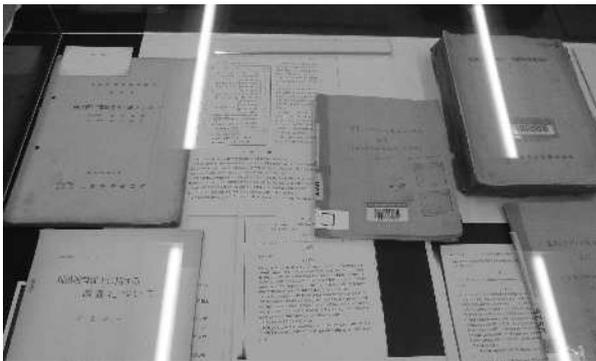
(2)土木技術情報ライブラリーで保管する技術情報の中から、「センターアーカイブ展」等で、都民等に公開している技術資料〔著名な橋梁の起工当時の設計原図（約180橋）等〕



四谷見附橋(大正2年)の設計原図



『(1964)オリンピック関連街路完成記念冊子』



『地盤沈下調査5ヶ年事業報告 S31』等

5 建設局工事監督補助業務に関する技術者等の認定 (認定制度の終了)

1 建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定制度

建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定制度は、適切な技術力を有する技術者を「建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定審査委員会」で審査し、合格決定者について局長が認定し、補助技術者等として工事監督補助業務に従事するため、平成20年度から導入し、総務部技術管理課と土木技術支援・人材育成センターが連携して、毎年1回、認定業務を実施してきた。

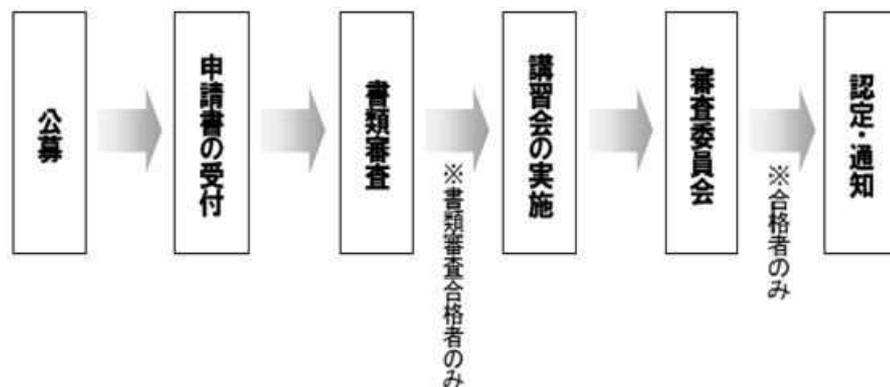
2 補助技術者等

補助技術者等とは、工事監督補助業務の履行に関し、業務の管理及び統括等を行う「管理技術者」及び管理技術者のもとで工事監督補助業務の実務を担当する「工事監督補助技術者」をいう。

3 認定業務の流れと令和5年度の認定業務の実施状況

令和5年度は、申請書の受付を令和5年11月1日から11月26日、講習会を令和5年12月14日・15日、認定・通知を令和6年1月26日に実施した。

【認定業務の流れ】



4 制度の移行と認定制度の終了

認定技術者数の減少への対応、認定申請者の負担軽減、煩雑な認定業務の簡素化を目的として認定制度から、他の委託業務と同様に契約締結後に技術者の資格等の要件を確認する制度に令和7年度から移行することとし、令和6年6月開催の「建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定審査委員会」で了承された。これにより、認定業務は実施せず本年度をもって認定制度を終了することになった。

5 規程の改定

センターで所管している、「建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定制度規程」について、「建設局工事監督補助業務に関する技術者等制度規程」に改め、規程内容を補助技術者等の定義と補助技術者等の資格等の要件について定める内容に改めた。また、「建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定審査委員会」設置要綱を廃止した。

6 今後の予定

認定制度終了について、東京都建設局のホームページの「技術支援」>「建設局工事監督補助業務に関する技術者等認定制度」に掲載するほか、建設局工事監督補助業務受託者の公益社団法人東京都道路整備保全公社、公益財団法人東京都公園協会、建設コンサルタント業界団体への通知、認定証を有する技術者に通知する。

6 職員表彰受賞一覧

令和5年度（局長表彰）

低炭素（再生）アスファルトの導入

〈概要〉

道路の舗装等で使用されるアスファルト混合物を製造する際に必要な各材料の加熱温度を標準から最大30℃低減させる技術（以下、中温化技術）について、都が行う道路事業において適用可能とするため、各種材料試験等を実施して技術的検証を行うとともに、国が主導する第三者機関のアスファルト混合物製造に係る事前審査委員会に、中温化技術による再生材を用いたアスファルト混合物（以下、低炭素（再生）アスファルト混合物）を申請し、承認を得た。

これにより、都が施工する舗装工事における低炭素（再生）アスファルト混合物の材料試験が簡略化され、利用促進が図られ普及促進につながるものである。

令和4年度（知事表彰）

低炭素アスファルトの導入（新しい東京賞）

〈概要〉

道路の舗装等で使用されるアスファルト混合物を製造する際に必要な各材料の加熱温度を標準から最大30℃低減させる技術（以下、中温化技術）について、都が行う道路事業において適用可能とするため、各種材料試験等を実施して技術的検証を行うとともに、国が主導する第三者機関のアスファルト混合物製造に係る事前審査委員会に、中温化技術による新材を用いたアスファルト混合物（以下、低炭素アスファルト混合物）を申請し、全国で初めてその承認を得た。

これにより、都が施工する舗装工事における低炭素アスファルト混合物の材料試験が簡略化され、利用促進が図られるとともに、区市町村をはじめ全国への普及促進につながるものである。

令和4年度（知事表彰）

首都直下型地震発生に備えろ！ 液状化予測の自動判定システムの開発

〈概要〉

都内には東部低地等を中心に液状化しやすい軟弱な地盤があり、今後想定される首都直下型地震等の発生に備えるため、最新の液状化危険度を適切に都民に発信していくことが必要である。

都では、昭和62年に液状化予測図を作成し、その後も対象区域を拡大しながら予測図を更新しホームページで公開している。令和4年3月、これまで都が収集してきた膨大なボーリングデータと地形に関する地図情報などから、液状化リスクを自動判定するプログラ

ムを開発し、最新情報に基づく精度の高い「東京の液状化予測図」としてホームページで公開した。

液状化予測図は、複数の都内自治体の防災に関するホームページで活用されるなど、都民の防災意識の啓発に寄与している。

令和3年度（局長表彰）

石神井川のスカム対策に向けた技術開発

〈概要〉

石神井川の王子駅付近では、しばしば水面に大量のスカム（河床に堆積した有機性の懸濁物質が水面に浮上したもの）が浮遊し、景観の悪化や悪臭の発生が問題となっていた。

これまでも、スカムの発生メカニズムは多くの調査や検討が行われてきたが、特定の区間に多くのスカムが集積するメカニズムについては不明であり、有効な対策を実施する上でその解明が求められていた。

そこで、石神井川感潮区間において流速の鉛直分布及び風向風速を計測し、下流から吹く風の影響によって王子駅付近にスカムが滞留するメカニズムを解明した。

また、スカム対策の効果を示す上で、スカムの浮遊量を継続的にモニタリングすることが望ましいが、水質と異なりセンサーによる連続計測ができないため、カメラ画像等から人が目視でスカムを判定する必要があった。

このため、AIによってカメラ画像からスカムを自動的に判定するプログラムを開発し、スカムの浮遊量を定量的に把握する手法を確立した。

令和元年度（局長表彰）

視覚障がい者誘導ブロックに対する総合的なすべり対策スキームの開発

〈概要〉

都内で供用されている視覚障がい者誘導ブロックに、一部すべり抵抗の低いものが存在し、自転車や歩行者の交通安全上の課題となっていた。

安全対策を実施するにあたっては、現道での誘導ブロックのすべり抵抗値を測定・評価できる試験機器・評価方法が必要となるが、従来これを評価する方法が確立されていなかった。

このため、すべりに対する維持管理上の目安や基準値等についても定めることができず、交通安全上支障がある製品についての対応が困難であった。

これらの課題を解決するため、東京都で歩道舗装のすべり抵抗値を測定する際、一般に用いられている振り子式スキッドレジスタンステストを用い、新たに誘導ブロックについての測定・評価方法を開発した。

合わせてすべりに関する規格値案、試験法、および現場点検時に活用が期待できる簡易な測定手法などを考案し、視覚障がい者誘導ブロックのすべりに対する安全確保に向けた総合的な対策スキームを確立した。

Ⅲ 成果の公表等

1 土木技術支援・人材育成センター発表会の開催

当センターでは、都及び区市町村の土木技術職員における技術力の維持・向上に資するため、またセンターの技術情報提供を目的として、センター職員が取り組んできた調査・開発の成果を毎年公表している。

センター発表会は、毎年、道路、橋梁、河川等の各分野における成果から、都政や都事業にタイムリーなテーマについて職員が発表している。令和6年度は10月29日（火）に東京都第一本庁舎5階 大会議場にて開催を予定している。

（参考）令和5年の開催状況は下記のとおりである。

令和5年度 土木技術支援・人材育成センター発表会

日 時／令和5年10月25日（水）

場 所／東京都庁第一庁舎5階 大会議場



平成5年度 土木技術支援・人材育成センター発表会プログラム

1 中温化再生アスファルト混合物(機械式フォームド方式)による

試験施工結果と技術検証

技術支援課 道路環境支援担当

上野 真誉

2 昭和39年道路橋示方書基準のRC床版厚160mmと190mmの

疲労耐久性

技術支援課 材料施工担当

関口 幹夫

3 関東大震災における東京市道路局試験所の被害調査について

技術支援課 技術支援担当

小作 好明

特別講演

非破壊試験方法に基づく既設コンクリート構造物の調査・評価

～弾性波伝搬の視点から～

東京都立大学 都市環境学部 都市基盤環境学科 准教授

大野 健太郎

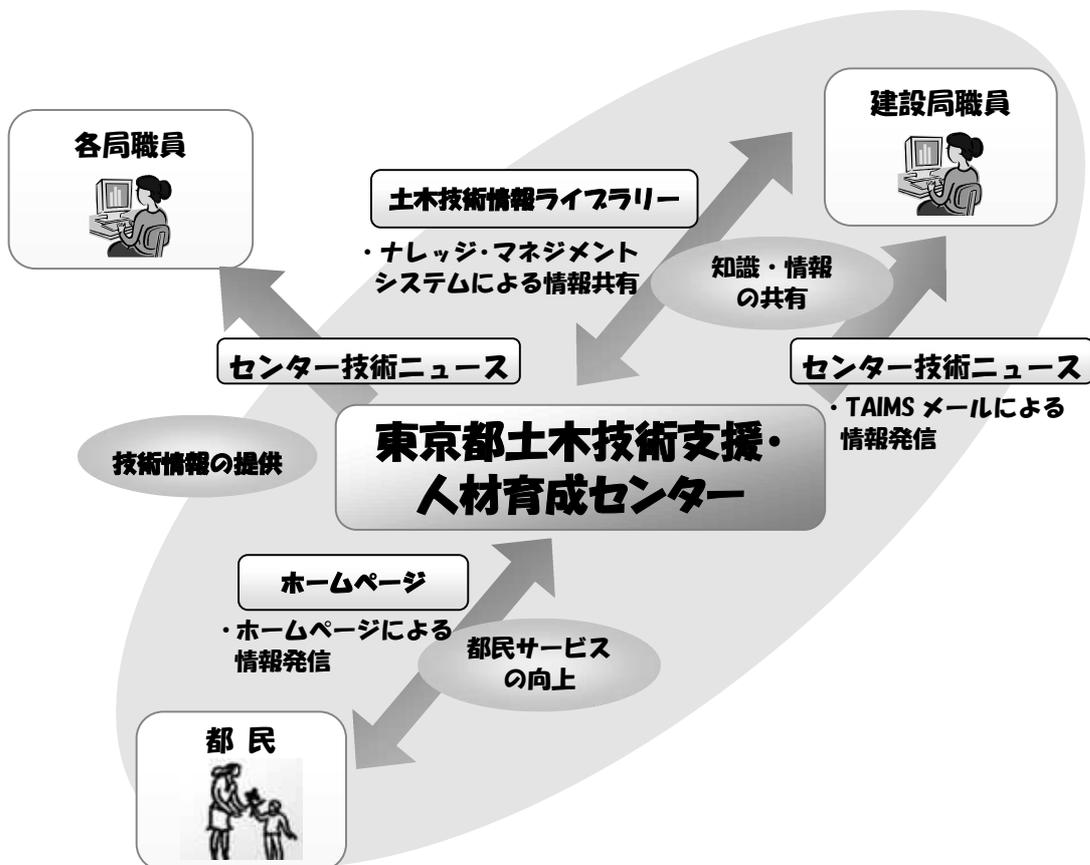
2 センター技術ニュースの発行等

センター技術ニュース

センターの役割、業務内容、調査開発や技術支援の成果、最新技術情報を分かりやすく編集して、業務に活用してもらうため、『センター技術ニュース』を作成し、TAIMS メールにより都庁職員向けに情報を発信している。(年4回)

なお、都民向けにはホームページから、センターで蓄積してきた地盤沈下や公共基準点等の技術情報、調査開発の成果として年報等の情報を提供している。

以下に、当センターの情報発信の概念図を示す。



3 東京都土木技術支援・人材育成センター年報

センターでは、「調査・開発」のテーマを中心に、センターの事業の成果を論文形式で取り纏め収録した年報を、毎年度刊行している。内容は基礎的な調査から、新しい時代に対応できる調査開発など幅広い分野にわたり、分かりやすいものとなるよう心掛けている。

令和5年度年報

【 報告編 】

- | | | |
|---|--|-------|
| 1 | 保水性舗装、遮熱性舗装及び低騒音舗装の試験体による室内放湿量測定 | 小作 好明 |
| 2 | 中温化再生アスファルト混合物（機械式フォームド方式）による 試験施工結果と技術検証 | 上野 真誉 |
| 3 | 東京都管理河川の特別区移管と管理変遷 | 石原 成幸 |
| 4 | 都内地盤の横方向地盤変形係数について | 中山 俊雄 |
| 5 | 令和4年の地盤沈下 | 國分 邦紀 |
| 6 | 昭和39年道路橋示方書基準のRC床版厚160mmと190mmの疲労耐久性 | 関口 幹夫 |

【 資料編 】

- | | | |
|---|------------------------|-------|
| 1 | 中小河川の高水流量観測の記録（令和2～3年） | 枝澤 知樹 |
| 2 | 新技術の評価・選定 | 辻 昌弘 |
| 3 | 令和4年度の強震観測記録 | 小作 好明 |

【 紹介編 】

- | | | |
|---|-----------------------------|-------|
| 1 | 東京都3次元地盤モデル作成システムの構築（その5） | 中山 俊雄 |
| 2 | VR橋梁上部工モデルの製作と活用 | 伊丹 博之 |
| 3 | 関東大震災における東京市道路局試験所の被害調査について | 小作 好明 |

4 大学等との共同調査研究

今年度は、1大学及び3団体と相互に補完し得る調査研究分野で、人的資源や設備を活用して、事業上の課題の早期解決、技術力の向上を図る目的で、共同研究を実施する。

1 河川流域整備に関する研究

- (1) 共同研究者 東京都立大学
- (2) 所管担当 河川・緑化支援担当、地下水・基準点情報担当
- (3) 期間 令和3年度～令和7年度
- (4) 内容

・中小河川流域における雨水流出抑制施設等による浸水被害の軽減効果検証のため、施設の設置の有無や規模と治水安全度の関係性を評価する方法の開発を目指す。その際、水文データについてのディープラーニング等のAIを用いた照査や、リモセンデータ等を用いて水災害情報の作成を試みる。また、神田川・環状7号線地下調節池の効率的な運用検討を試みるものとする。

2 未利用資材としての高針入度アスファルトの舗装への適用性に関する研究

- (1) 共同研究者 (国研) 土木研究所、(一社) 日本アスファルト合材協会
- (2) 所管担当 道路環境支援担当
- (3) 期間 平成25年度～
- (4) 内容

・再生アスファルト混合物製造時に使用してきた再生用添加剤の代わりに高針入度アスファルトの適用を検討する。

3 河川構造物のDEF現象を考慮した長期耐久性の検証

- (1) 共同研究者 東京都立大学
- (2) 所管担当 材料施工担当
- (3) 期間 平成30年度～令和30年度
- (4) 内容

・わが国にはDEFに関する規格化された試験方法や標準となる評価方法が現状としてないため、PCA製品および大規模河川構造物と同配合の供試体を作製しDEFによる影響評価を行っていく。

4 中温化剤等を用いた中温化混合物の製造・施工に関する調査研究

- (1) 共同研究 一般社団法人日本アスファルト合材協会、一般社団法人日本改質アスファルト協会
- (2) 所管担当 道路環境支援担当
- (3) 期間 令和6年度～令和9年度
- (4) 内容

・CO2排出抑制効果があり、かつ施工性・作業性の改善効果も見込める中温化技術を活用した混合物の普及、展開に向けた基礎性状、供用性の把握を目的として研究を実施する。

IV 活動・行事

1 科学技術週間関連行事 センター一般公開

科学技術週間（発明の日である4月18日を含む月曜日から日曜日までの一週間）にあわせ、科学技術をより身近なものとするを目的として、毎年「センター一般公開」を実施している。

令和5年度は、4月19日に開催した。

来場者参加による体験イベント「レンガで橋を作ろう」や、地盤構造、液状化予測、地下水位観測、河川環境、公共基準点測量などのセンターで蓄積し保有する技術情報及び過去の貴重な資料を展示する「アーカイブ展」などのほか、環境にやさしい道路舗装の説明、構造物モデルのVR体験等を実施した。



【レンガで橋を作ろう】



【東京の地盤、液状化予測図の展示】



【公共基準点・水準測量の機器展示】



【アーカイブ資料展示】



【VR構造物体験】

2 「くらしと測量・地図展」の共同開催

東京都及び「測量の日」東京地区実行委員会（事務局：国土地理院関東地方測量部）は、6月3日「測量の日」の記念行事として、「くらしと測量・地図展」を共同開催している。

当センターは、公共基準点、水準測量及び地盤沈下などの測量に関する展示のほか、東西地質断面図や東京の液状化予測図など防災対策に役立つ地図や調査開発の成果を公開している。このほか、アーカイブ資料として、隅田川に架かる復興橋梁の今・昔を写真等で紹介している。

これらの展示を通じて測量・地図が、安全・快適なくらしを支え、防災対策などに広く貢献していることを分かり易く伝えるため、下記日程により開催した。

○ 開催日時 : 令和5年6月7日（水）～6月9日（金）

○ 開催場所 : 新宿駅西口広場イベントコーナー

○ 主な展示内容

- ・東京都土木技術支援・人材育成センターの測量や地盤沈下、地盤環境に関する展示、地図で振り返る東京の震災復興の展示ほか
- ・国土地理院による日本地図の巨大な床展示、関東大震災に関する特設コーナー、ミニ講演会ほか
- ・その他団体による実物測量機器による距離当てゲーム、基準点カードの展示・配布ほか

○ センターの展示状況

公共基準点等の実物展示



地図で振り返る東京の震災復興の展示



3 「土木技術講習会」の開催

「土木技術講習会」は、土木技術に関する最新の情報について、産官学の外部講師による講演から幅広い知識と見識を得ることで、建設局のみならず、都及び市区町村の技術系職員の技術力向上を図り、今後の行政運営の一助とすることを目的として、毎年、土木技術支援・人材育成センター主催で開催している。

昭和46年8月に開催された「土木技術研究会」が前身であり、昭和48年度からは外部講師を招き開催している。

なお、平成26年度からは、教育的効果が高いと評価され、土木学会CPD（継続教育制度）プログラムに認定されている。

令和5年度は、関東大震災100年をテーマに、関東大震災から復興がどのように行われ、我々土木技術者はそこから何を受け継ぐべきかについて講演いただいた。また、講演に先立ち、発災直後の状況を捉えた100年前の貴重な映像も上映した。

○開催日時

令和5年7月7日（金）13時15分～17時10分

○会場

東京都庁第一本庁舎5階 大会議場

○テーマ

『関東大震災100年～受け継ぐもの 伝えていくもの～』

○特別上映

「関東大震災記録映像」《江戸東京博物館所蔵》

○講演内容

「復興は橋から～復興橋梁から何を学ぶか～」

（公益財団法人）東京都道路整備保全公社 紅林 章央 室長

「関東大震災と東日本大震災～100年後の復興事業～」

（公益財団法人）自転車駐車場整備センター 樺島 徹 理事長

「関東大震災とその復興事業～技術の理論化と継承～」

日本大学 理工学部 土木工学科 大沢 昌玄 教授



講演の様子

4 地方公共団体建設技術試験研究機関連絡協議会 (建試協) 総会の開催

1 目的

全国の地方公共団体に所属する試験研究機関等が共通する技術的な問題を話し合い、情報交換を行って相互の連携を深めるとともに、我が国の技術力の向上に資することを目的に、昭和52年建設省(現国土交通省)の大臣官房技術審議官並びに土木研究所長(現国土技術政策総合研究所所長)を顧問に迎えて、地方公共団体建設技術試験研究機関連絡協議会(略称「建試協」)を設立した。現在、会員数は51団体となっている。

2 会の活動

建試協の主な活動は、ブロック会議、幹事会及び総会・会員発表会により行われている。

(1) ブロック会議

全国を4ブロックに分け、地域内の共通課題について話し合い、情報交換を行っている。

(2) 幹事会

各ブロック幹事により、建試協の年間活動を行っている。

(3) 総会・会員発表会

毎年一度、全会員が一堂に会し、建試協の運営、その他重要事項について討議するとともに、会員の研究成果について発表している。

3 建試協における土木技術支援・人材育成センターの役割

令和5年度より当センターは会長職(任期5年)並びに東京都事務局として、建試協の発展と会員相互の連携の強化に主導的に関わっている。なお、副会長職は大阪府が務めている。

4 総会・会員発表会

令和5年度については、オンラインにより開催した。

開催日時等：令和6年1月31日(水曜日) オンライン (Zoom)

<総会議題>

- (1) 令和5年業務運営報告
- (2) 各ブロック会議の活動状況報告及び提案議題、並びに幹事会活動状況報告
- (3) 事務局提案議題の集計結果の報告
- (4) その他 会員の異動、会則の改正等、令和6年度ブロック幹事、令和6年度業務運営

<会員発表>

- (1) 「土木職員研修のWebによる実施状況について」 徳島県 県土整備部 建設管理課
- (2) 「VR構造物モデルの技術研修への活用について」
東京都 土木技術支援・人材育成センター 技術支援課
- (3) 「(公財)大分県建設技術センター花津留庁舎の視察報告」
(公財)東京都道路整備保全公社 土木材料試験センター
- (4) 「当センターで実施しているコンクリート維持系試験の現状」
(公財)鳥取県建設技術センター
- (5) 「データ転送システムの導入による作業の効率化」 (一財)広島県環境保健協会
- (6) 「職員ドローン操縦士の育成と確保」 神戸市 建設局 技術管理課
- (7) 「遠隔臨場の試行(山間地)について」 奈良県 県土マネジメント部 技術管理課

5 東京都技術情報連絡協議会の運営

1 目的

これまで東京都の各局が長い間に蓄積してきた膨大な技術情報は、それぞれの局の中だけで活用されてきた。しかし、事業を進める中で、多様化し複雑化する様々な技術情報を各局が共有化し、互いに活用していくことが極めて重要である。

これらの情報の一元管理・活用方法の検討、全都庁の財産としての次世代への継承、職員の技術力の維持向上を目的に、平成 18 年に「東京都技術情報連絡協議会」（以下、協議会という。）を設立した。

2 概要

- (1) 協議会は、東京都の技術に関する情報交換や意見交換及び情報の活用等の検討を行う。
- (2) 協議会メンバーは、主に公共施設の建設及び管理を行っている建設局、財務局、都市整備局、港湾局、交通局、水道局、下水道局及び令和元年度に参入した住宅政策本部を加えた 8 部局とする。
- (3) 委員は各部局の新技術の選定等を担当する課長とし、委員長は当センター所長とする。
- (4) 各部局の技術情報は電子化した上で、都の技術情報の窓口としての当センターに集め、整理した上で各部局に発信する。各局は配信された情報を自部局の職員が活用できる環境を整え、発信する。

3 設立の経緯

- (1) 第 62 回東京都技術会議では新技術情報のワンストップステーション化とこれに向けての東京都土木技術センターの活用が提言された。
- (2) 第 1 回東京都技術情報連絡協議会を平成 18 年 11 月 28 日開催し、設立の合意を得るとともに、活動方針、活動内容等について意見交換を行った。
- (3) 東京都技術情報連絡協議会設置要綱を制定し、協議会活動を開始した。

4 実施概要

- (1) 実務者レベルの幹事会および協議会を開催する。
- (2) 各部局から提供される新技術情報、資料等の質、量の充実を図る。
- (3) 技術情報データベースを発展・充実させ、技術力向上のスパイラルアップを図る。

6 土木の日関連行事 土木技術体験学習、センター一般公開

毎年11月18日の「土木の日」（土木という漢字は、十一、十八に分解できる）関連行事として、地元小学校を招き土木技術体験学習やセンター一般公開を行っている。

令和5年度は11月13日に開催し、江東区立南砂小学校から5年生67名がセンターを訪れ、職員の指導のもとに実験や体験学習に熱心に取り組んだ。

児童たちは、普段学校では教わらない土木技術の体験に目を輝かせ、元気よく質問したり、歓声を上げるなどしていた。また、地域の皆様に土木技術への理解を深めてもらうことを目的として、センター一般公開を併せて実施した。



【レンガと砂でアーチ橋を作ろう】



【材料試験を体験しよう】



【水質を調べてみよう】



【所長の話を聞く生徒達】

7 「東京 橋と土木展」、センターアーカイブ展

1 「東京 橋と土木展」の開催

毎年11月に公益社団法人土木学会主催(東京都建設局共催)「土木コレクション」と同時開催で、「東京 橋と土木展」を道路管理部と協力し、新宿駅西口広場イベントコーナーで開催している。

令和5年度は、『関東大震災100年～震災復興のレガシーと災害に負けない強靱で持続可能な都市づくりへ』と題し、「大東京復興模型」「両国橋 橋名板」など、震災復興に関する展示のほか、隅田川橋梁群のライトアップパネル、道路・橋梁関係事業展示として、「無電柱化模型」や多摩川に架かる「日野橋模型」、河川事業では「白子川地下調節池模型」、公園事業は「防災公園」など、TOKYO 強靱化プロジェクト関連の展示を行い、建設局の事業を含め幅広く紹介を行った。

令和5年11月21日(火)から同月24日(金)の4日間で約4万8千人の来場者を集めた。



【大東京復興模型展示】



【両国橋 橋名板展示】



【日野橋模型展示】

2 「センターアーカイブ展」の開催

センターが所有する貴重なアーカイブ資料(図面や写真など)について、土木のイメージアップと都民への公開を目的に、アーカイブ展示を行っている。

平成30年度より、センター内において「センターアーカイブ展」を開催し、テーマに応じて選定した資料(説明パネル、原図、映像など)を一般公開している。



「センターアーカイブ展」

また、東京都立大学と連携し、大学祭「みやこ祭」にて出張アーカイブ展を開催した。(令和5年11月3日、4日)。

関東大震災復興橋梁など橋のアーカイブ図面などの展示を行い、2日間で約600名の来場があった。



アーカイブ展(東京都立大学)の状況

【主な用語の解説】

(あ)

・ICT (Information and Communication Technology)

情報通信技術と訳す。情報処理、特にコンピュータなど情報機器間の通信技術を含む、基礎あるいは応用技術の総称。建設 ICT は、広義には建設事業に関する全ての業務に対して情報通信システムを活用することを指し、近年では測量、設計、施工、監督、検査等への三次元データの活用など、建設工事の効率化を図るシステムを指すことが多い。

・雨水貯留浸透施設

降水の一部を流域内に設置した貯留施設（プールや池など）に一時貯めたり、浸透施設（透水性舗装など）で地下に浸透させ河川への直接の流出を抑制させるための施設である。

・液状化対策

対策工法には、液状化しやすい地盤を地盤改良によって液状化しにくい地盤に変える方法と、地盤が液状化しても構造物基礎が破壊しないように構造物に対策を施す方法がある。前者の代表的な工法には締固め工法や排水促進（ドレーン）工法、固結（深層混合）工法がある。また、後者としては、杭基礎の本数を増やしたり、杭径を大きくする設計が実施されている。

・エコセメント

家庭から出る都市ごみを燃やした後に残る焼却灰を主な原料として用いたセメントで、焼却灰に副資材（石灰石等）を加えて化学成分を調整し、1350℃以上の高温で焼成することにより、水硬性を有するセメント鉱物に変化し、これを微粉碎したものである。

(か)

・環境舗装

良好な環境を保つために環境への負荷が少ない機能を持った舗装である。当センターとしては、路面温度の上昇抑制、タイヤと路面の騒音の低減、雨水

の地盤への浸透、CO₂の削減等の機能を考えている。

・観測井(かんそくせい)

地下水位の変動と地層の収縮（沈下）、膨張（隆起）を同時に測定できるように考案された深井戸で、東京都では、深さ26mから450mまでのものが設置されている。設置深さに対応した地層の収縮、膨張量が測定できる。

・基準点

基準点とは、地球上の正確な位置と高さを求めるために設けられたものである。

基準点は、水準測量等で高さ（標高）を求める際に使用する水準基準（水準点）と、基準点測量等で平面位置を求める際に使用する三角点（国）や公共基準点（地方公共団体）からなり、これらを総称して基準点という。

・強震観測

強震計は、被害が生じるような大きな地震でも正確な地震波形を記録するために開発された強震計である。強震観測は、この強震計を用いて大きな地震を対象として観測を行うものである。

・緊急輸送道路

災害基本法に基づく地域防災計画、地震防災対策特別措置法に基づく地震防災緊急五箇年計画における地震防災上緊急に整備すべき施設として位置付けられ、地震直後から発生する緊急輸送の円滑かつ確実な実施が図られるよう、あらかじめ区間を設定した道路

・計測安全管理

土留め仮設や工事の周辺地盤に各種計測機器を取り付け、そのデータを基に事前に危険信号キャッチし対策を講じる。危険度の判断は、事前の理論的計算値と実測値を比較して、あらかじめ定めた管理基準値との大小関係から判定する。

・高水流量観測

洪水時における河川の流量を測定し、水位・流量の関係を求めるために行う。知りたい箇所、横断面をいくつかの測定断面に区分し各区分断面毎の流

速を浮子や流速計を利用して測定し、流速と断面積の積を各区分断面の区分流量として求め、その総和をその箇所の流量(単位時間当たり)とする。計測時の水位(水深と流量との関係を、H-Q式と呼び、一般に水位の二次曲線回帰式で表すことが多い。

・構造物のライフサイクル

構築された構造物は、使用年数と共に老朽化し何時かは使用不能となりその寿命を終える。構造物の寿命をできるだけ延ばすには、適切な時期に、効果的な補修・補強を行うなどの維持管理が必要となる。このように、各種構造物において補修補強を行っていく周期(サイクル)をライフサイクルという。

・鋼板接着工法

老朽化し耐荷力などが減少した鉄筋コンクリート床版に対し、鋼板をエポキシ樹脂によってコンクリート面に接着し鋼板とコンクリートを一体化して作用させひびわれの防止、耐荷力の増加を図る工法をいう。

(さ)

・再生アスファルト混合物

一度使用したアスファルト混合物を再度利用した材料。再生添加剤やアスファルトおよび補足材を加えて製造する。ほぼ新しい材料と同等に利用できる。

・再生骨材

建築物などの解体時に発生したコンクリート解体材を加工し、再びコンクリート用の骨材として再利用できるようにした骨材である。再生骨材の品質は、「H」「M」「L」の3段階に分けられる。

・サービス水準

道路を利用する車両の運転者や歩行者が受けるサービスの質の程度を表す尺度で、その道路を交通運用の状態や快適性等を表すものである。

・支持力

構造物の荷重や地震力を支える地盤の耐力をいう。荷重の増加により地盤耐力が限界に達し破壊するときの支持力は特に極限支持力と呼ぶが、単に支持力と呼ぶこともある。支持力(極限)は基礎の形式・形状と地盤の強さによって決定される。

・遮熱性舗装

路面温度を上昇させる原因である太陽光の近赤外線を反射しやすい遮熱材料を舗装表面に塗布し、舗装表面の温度の上昇を抑える機能を持った舗装である。

・深層地下水

深い所に分布する地層中に含まれる地下水の一般語で、被圧地下水と同意語である。

・GIS

地理情報システム(Geographic Information Systems)の略で、文字や数字、画像など地図と結びつけて、コンピューター上に再現し、位置や場所からさまざまな情報を統合したり、分析したり分り易く地図表現することが出来る仕組みのことである。

・地盤

地下に分布している地層について、構造物を造ることを対象とした際に用いることばで、硬軟、振動波による挙動、支持力などの性質を配慮している。

・地盤情報システム

土木、建築の工事では事前に地質調査ボーリングがよく行われる。本システムは、その際の地質試験結果など、地盤に関する多くの情報をデータベース化しておくことによって、必要な際にいつでも直ちに利用可能にしたもの。地盤図等の調査研究のほか、建設・防災・環境行政等の基礎資料として活用範囲は広い。

・地盤沈下

今日では、政治経済の分野でも別の意味で使われているが、ここでの意味は地下から液体(地下水、石油、天然ガス等)を採取するために起こる地表面の沈下をいう。通常、被圧地下水の揚水(水位低下)に伴う現象を(広域)地盤沈下という。

語源は昭和10年ごろ、故宮部直巳博士が地表面の沈降現象を地盤沈下と呼んだのが始まりである。

・地盤の液状化

地震時に砂層が強度を失い液体状になる現象。地下水位が浅くゆるい砂が堆積した地盤で発生しやすい。ときに数メートルの水平方向の地盤移動を伴うこともある。

・GPS

汎地球測位システム(Global Positioning System)の略語でアメリカが上げた24個の人工衛星を利用して、衛星から発信される電波を受信することにより、地球上の位置や高さを計測することを可能にするシステムのことをいう。

観測方法としては、単独測位と相対測位の2通りの方法がある。

・水準基標

水準点と同意語であるが当センターが設置・管理している水準点は水準基標の名称を用いている。半球体の突起を持った金属性の鋌を、標石の頭部に取りつけて地下に埋め、マンホールで覆ったものである。

・水準(一等水準)測量

地盤の高低差を測るための測量方法で、日本水準原点(東京湾平均海面 24.3900メートル)を基準としている。このうち、最も精密度が要求される測量を一等水準測量という。

・水準点

水準測量により地盤の高さ(標高)を求めるための点であり、半球体の突起を持った金属鋌または標石を、地上あるいは地下に設けたものである。

・浅層地下水

浅い所に分布する地層中に含まれる地下水の一般語で、不圧地下水と同意語である。

(た)

・帯水層

地下水を豊富にもつ透水性の高い地層のことである。砂層や砂礫層からなる。帯水層内に地下水面があるとき不圧帯水層といい、帯水層の上部が難透水性の地層で被覆され、水頭が帯水層上端より高いとき被圧帯水層という。

(土質工学標準用語集、土質工学会、1990)

・縦桁増設工法

RC床版の損傷の原因として、輪荷重の増大や交通量の増加を挙げることができるが、これらによる床版の剛性不足を補うために既設主桁間に新しい床版支持用の縦桁を設ける工法をいう。

・地下水かん養効果

雨水浸透ますなどの浸透施設の設置は、治水上の流出抑制効果はもとより、雨水を地下に浸透させることにより地下水量を保全・回復させる。地下水のかん養の効果として浸水の復活、河川維持流量の確保に寄与する。

・地質

地球の表層部にある岩石や地層のこと。具体的には、岩石の地層の組成(構成物質やその形態・組織)、それらの分布状況・相互関係などをいう。さらに、その生成過程や形成年代を扱う。

・中温化技術

舗装工事で使用する加熱アスファルト混合物の締固め性を向上することで、加熱アスファルト混合物の製造・施工温度を低減することができる技術である。

また、加熱アスファルト混合物の製造温度の低減により燃料消費量が削減でき、二酸化炭素排出量の抑制にもつながることから、この中温化技術を活用した中温化舗装は低炭素アスファルト舗装とも呼ばれている。

現在、国内における中温化技術にはいくつかの種類があり、中温化の効果が得られるメカニズムの違いから大きく発泡系、粘弾性調整系および滑剤系に分類されている。

・土(つち)構造物

狭義には土を盛土材料とした土堤をさすが、広義には材料の主体が土によって構成されている構造物、例えば大規模な埋立地や岸壁、都市河川のコンクリート護岸、道路橋梁の取付け部分も含まれる。

・低騒音舗装

道路交通による騒音を低減するための舗装であり、通常の舗装に比べて空隙が大きなアスファルト混合物を表層に使用している。この舗装は、タイヤと路面との騒音の低減効果の他に排水機能も持ち合わせ、降雨時の安全走行にも寄与する。

・東京都公共基準点

東京都公共基準点とは、国の三角点を基にして東京都として統一した基準のもとに当センターが設置・

管理している基準点のことである。

測量精度としては、一級精度以上を有し、道路・河川事業や都市再開発・区画整理事業等の測量に広く利用されている。

・東京都地域防災計画

震災、火山及び風水害に係る予防対策、応急・復旧対策及び震災復興を実施することにより、都民の生命、身体及び財産を災害から保護することを目的としている。この計画では、都、区市町村、指定地方行政機関、自衛隊、指定公共機関、指定地方公共機関等の防災機関が、行うべき災害対策を具体的に記載している。

・透水性舗装

通常の舗装は雨水を浸透させない構造となっているが、透水性舗装は、舗装体を通して雨水を地盤に浸透させ、雨水の流出抑制や雨水を地中に還元する機能を持った舗装である。

・都市施設

都市計画法では、都市施設とは道路・公園等都市の骨格を形成し、円滑な都市活動を確保し、良好な都市環境を保持するための施設の総称であるとしている。都市施設には道路等の交通施設、公園緑地等の公共空地、上・下水道等の供給・処理施設、河川等の水路等々が含まれる。

・土地条件図

洪水や地震などの被害は、その場所の地形と密接に関連していることが知られている。土地条件図とは、国土地理院が、日本の都市の地形について、形態や、どのような作用でできたかなどの観点から分類した地図である。

・トリチウム

水素の放射性同位元素であり、大気圏上層で太陽から来る宇宙線中の中性子と大気中の窒素の原子核との衝突によって生成される。通常は、水分子(降水)の形で自然界の水循環系に取り込まれており、その過程で約12年の半減期をもって崩壊する。したがって、降水や地下水中のトリチウム濃度を測定し、比較することにより、地下水の生成年代や流動状況を推定することができる。

・道路陥没

道路陥没は舗装下に発生した空洞によって、路面が陥没するものであり、その原因の約6割は埋設間の埋戻し不良や上下水道管の破損等によって起こるが、残りの4割は原因不明である。多くの場合、水が介在している。

(な)

・二層式低騒音舗装

舗装路面を二層構造としたもので、二層の下層では通常粒径の骨材、上層には小粒径の骨材を使用し、二層同時に施工するもので、従来の低騒音舗装よりさらに騒音低減効果を持たせた舗装である。

・入力地震動

構造物の耐震設計の一方法に動的応答解析法がある。これは、地震動に対する構造物の時々刻々の振動応答を算定するものである。この時に対象とする構造物のモデルに作用させる地震波形のことをいう。

・NETIS

新技術情報提供システム～New Technology Information System～

国土交通省が運用している新技術に係る情報を、共有及び提供するデータベース。平成10年度より運用を開始し、平成13年度よりインターネットで一般にも公開。有用な新技術の情報を誰でも容易に入手することが可能。

(は)

・VR(バーチャル・リアリティ)

Virtual Reality(仮想現実)の略で、コンピュータによって作られた仮想的な世界を、現実世界のように体感できる技術を言う。ゴーグル型のデバイスを頭部に装着し、体験する場合が多い。

当センターでは令和3年度から、VR技術を活用した構造物モデルの作成に取り組んでいる。

・発生土利用率

道路を堀削して発生した土(発生土)に生石灰を混合した改良土や発生土に水とセメント系固化材を混合した流動化処理土の全容積に占める発生土の割

合であり、この率が大きいと発生土の再利用の促進につながる。

・被圧地下水

粘土層、シルト層のような水を透しにくい地層(加圧層、難透水層、不透水層と呼ばれることもある)に上下を挟まれた帯水層(砂礫層、粗粒砂層)の地下水をいう。この帯水層に井戸の採水孔(ストレーナー)を設けると、地下水位は帯水層の上限より高い位置に上昇する(圧力を持っている)。また、揚水すると地下水位が低下し、地盤沈下が発生する。この地下水は、降雨の影響を直接に受けない。

・ヒートアイランド現象

都市の中心部と郊外と比較して常に気温が高いということは、100年以上も前から報告され世界中の多くの都市でも確かめられている。都市部の気温が周辺部よりも高くなる現象をヒートアイランド現象という。原因については、①アスファルト舗装の道路が太陽の放射熱で深層まで高温となり、蓄熱された熱が夜間放射される、②樹木等の緑被率が小さくなり、地表からの蒸発潜熱が減少する、③都市部への人口集中で各種エネルギーの使用が増加し、排熱量が増加する、④高層建築物の壁面で多重反射することで、都市の構造物が過熱されやすくなる等の要因が考えられている。

・不圧地下水

自由地下水ともいう。地表から浸透した水(降雨、河川水等)が粘土層のような難透水層に達すると浸透、降下が阻止されて地下水の飽和帯が形成される。飽和帯の上限は土壌中の空隙を通じて大気圏と接し、地表水の供給量の増減に伴って変化する(雨の影響を受けやすい)。

・不同沈下

地盤を構成している地層が複雑であることなどが原因で構造物の基礎の沈下量が様でなく、場所により異なった沈下量を示すこと。この上に道路舗装をすると、凹凸のはげしい‘波乗り道路‘となるため、何らかの対策が必要となる。

・保水性舗装

空隙の多いアスファルト混合物に保水性のある材

料を充填した構造で、降雨など表面からの水を舗装体に吸収保持させ、蓄えられた水分が蒸発する際の気化熱で舗装面の温度の上昇を抑える機能をもった舗装である。

・舗装の供用性

舗装は、交通開始とともに、路面の変形やひび割れ等の破損及び支持力の低下が徐々に進行するが、舗装の供用性はこれらの変化のしかたを経時的に表すものである。

・舗装路面騒音測定車

舗装のタイヤ/路面騒音の測定・評価を行う車両であり、特殊な形状のタイヤを用いて測定を行うものである。

(や)

・湧水量

降水の一部は地下に浸透する。この浸透水の一部が再び地上に湧き出てくる水を湧水と呼んでいる。ある湧水箇所において、一定時間(例えば一日単位)に湧き出てくる水量をいう。

・揚水試験

揚水を行う揚水井戸と、その周辺に複数の観測井戸を設け、揚水井戸から地下水を汲み上げ、観測井戸で周辺の地下水位の低下を測定して、帯水層の透水係数などを求める試験。

(ら)

・ライフライン

電気、ガス、上下水道、電気通信など都市生活や都市活動を支えるために地域にはりめぐらされている管路などである。多くは、地下など道路空間を利用している。

・流出解析

流域に降った雨水は、流域内で蒸発散や浸透滞留しながら、下水道や河川に流入・流出する水の動態現象の過程をとる。河川に流入するまでの過程と経路から、降雨に始まるこの水文現象を観測や実験・推定等し、河川への流出量や時間変化等を計算し定量的に解明する手法。対象とする時間スケール

によって、短期(洪水)流出、長期流出と呼ぶ。

流出率とは、一雨又はある期間の総降雨量に対する総流出量(対象とする流出成分)の比をいう。似た呼び方の流出係数は、ある降雨強度の雨が流域一様にある継続時間降ったときのピーク流出量を与える合理式の係数で、ピーク流出量を与える洪水到達時間内の最大平均降雨強度と有効降雨強度との比をいう。

・流出抑制効果

貯留浸透施設を設置することにより、雨水を一時貯留あるいは地下に浸透させるなどして流出量を抑制し、河川への負担を軽減する。

・流動化処理土

発生土にセメント系固化材と比較的多量の水を加えて混合し、流動性と硬化性を持たせた埋戻し用の処理土である。この処理土は、締固めをする必要がなく、埋設管の密集部分にも充填できることから、道路陥没の抑制につながる。また、打設後30分程度でこの上に舗装を施工できる実験結果が得られており、通常の埋戻し工法よりも短時間施工が可能である。

・レスキューナビゲーション

GPS携帯電話によって現場から送信される位置と道路被害の情報をインターネット経由でサーバーに集め、本庁と事務所のパソコンで受信する情報伝達ツール。

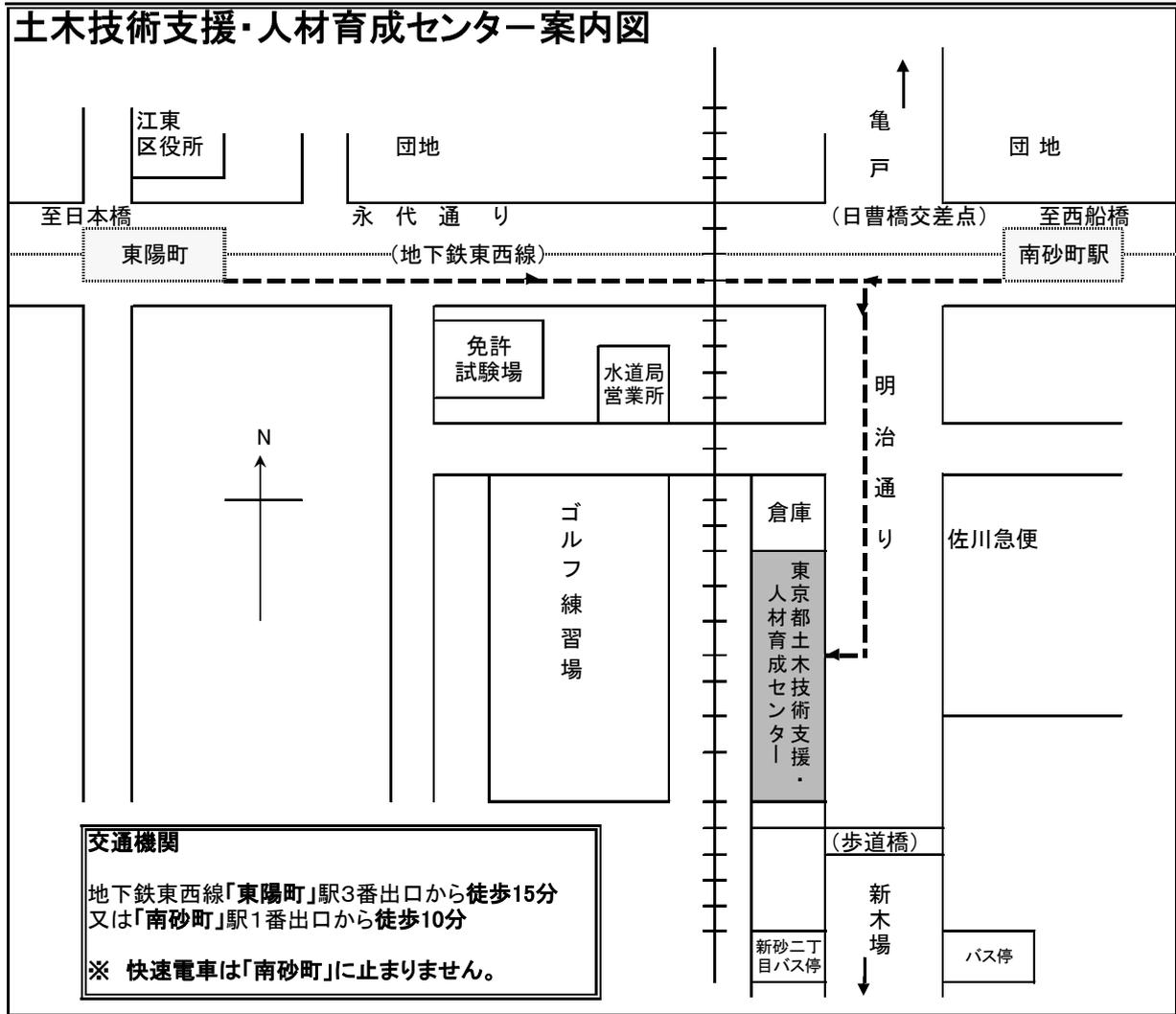
・路面性状

路面の状態の良否をいう。通常、その状態は、ひび割れ、わだち掘れ(横断方向の凹凸)と平坦性(縦断方向の凹凸)などによって表される。

【東京都土木技術支援・人材育成センター】

〒136-0075 江東区新砂一丁目9番15号

TEL 03-5683-1512 FAX 03-5683-1515



登録番号 (6) 第3号

東京都土木技術支援・人材育成センター 事業概要

令和6年版

令和6年9月 発行

編集・発行 東京都土木技術支援・人材育成センター
技術支援課

東京都江東区新砂1丁目9番15号

電話 03-5683-1512

FAX 03-5683-1515

印刷 有限会社 一力印刷所

東京都墨田区向島3丁目42番4号

電話 03-3625-0260

FAX 03-3625-0261

センターホームページ

<https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jigyo/tech/start/index.html>

HTT 能力を
へらす
つくる
ためる

Tokyo.Tokyo